

310.4
Si566t



* 0003898000 *

0003898-000

310.4-Si566t

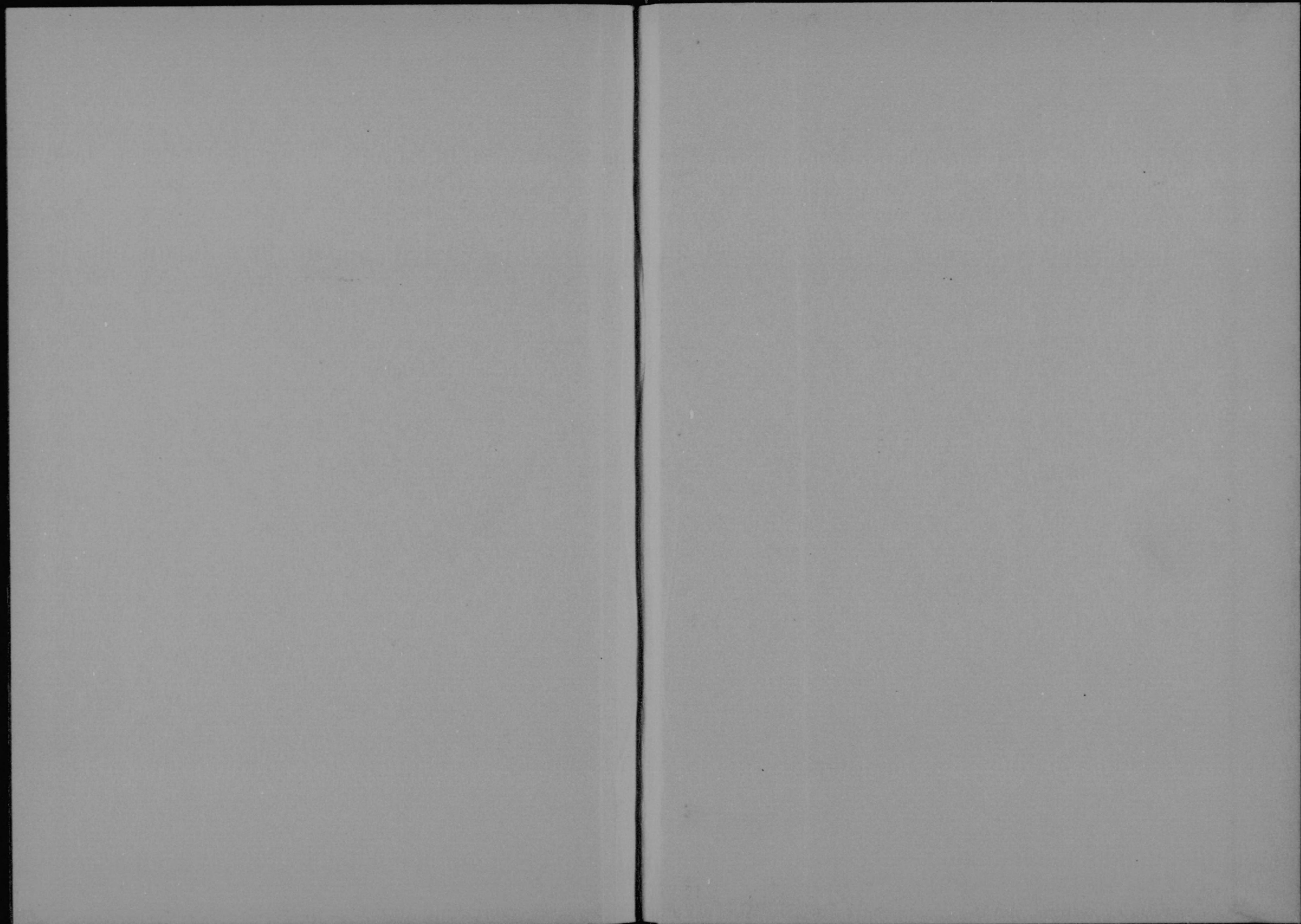
戦ひの時代

白鳥敏夫・著

第一書房

1941

ABA



512Q88

白鳥敏夫著
戰ひの時代



東京
第一書房

310.4
Si 566t

詔書

大義ヲ八紘ニ宣揚シ坤輿ヲ一字タラシムルハ實ニ皇祖
 皇宗ノ大訓ニシテ朕カ夙夜眷々措カサル所ナリ而シテ
 今ヤ世局ハ其ノ騷亂底止スル所ヲ知ラス人類ノ蒙ルヘ
 キ禍患亦將ニ測ルヘカラサルモノアラントス朕ハ禍亂
 ノ戡定平和ノ克復ノ一日モ速ナランコトニ軫念極メテ
 切ナリ乃チ政府ニ命シテ帝國ト其ノ意圖ヲ同シクスル
 獨伊兩國トノ提協力ヲ議セシメ茲ニ三國間ニ於ケル
 條約ノ成立ヲ見タルハ朕ノ深ク憚フ所ナリ
 惟フニ萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク
 其ノ培ニ安ンセシムルハ曠古ノ大業ニシテ前途甚タ遠
 遠ナリ爾臣民益々國體ノ觀念ヲ明徴ニシ深ク謀リ遠ク
 慮リ協心戮力非常ノ時局ヲ克服シ以テ天壤無窮ノ皇運
 ヲ扶翼セヨ

御名御璽

昭和十五年九月二十七日

日獨伊三國條約締結にあたり、長くも天皇陛下には優渥なる詔書を下し
 給ひ、現下内外の重大時局に際し國民の向ふところを垂示し給うた



寄贈
 淺沼亨子

645073

日本國獨逸國及伊太利國間三國條約要旨

大日本帝國政府、獨逸國政府及び伊太利國政府は萬邦をして各々其の所を得しむるを以て恒久平和の先決要件なりと認めたるに依り、大東亞及び歐洲の地域に於て各々其の地域に於ける當該民族の共存共榮の實を擧ぐるに足るべき新秩序を建設し、且つ之を維持せんことを根本義と爲し、右地域に於て此の趣旨に據れる努力につき相互に提携し且つ協力することに決意せり。而して三國政府は、更に世界到る所に於て同様の努力を爲さんとする諸國に對し、協力を吝まざるものにして、斯くして世界平和に對する三國終局の抱負を實現せんことを欲す。依つて日本國政府、獨逸國政府及び伊太利國政府は左の通協定せり。

第一條 日本國は獨逸國及伊太利國の歐洲に於ける新秩序建設に關し指導的地位を認め且之を尊重す

第二條 獨逸國及伊太利國は日本國の大東亞に於ける新秩序建設に關し指導的地位を認め且之を尊重す

第三條 日本國、獨逸國及伊太利國は前記の方針に基く努力に付相互に協力すべきことを約す更に三締約國中何れかの一國が現に歐洲戰爭又は日支紛争に參入し居らざる一國に依て攻撃せられたるときは三國は有らゆる政治的、經濟的及軍事的方法に依り相互に援助すべきことを約す

第四條 本條約實施の爲各日本國政府、獨逸國政府及伊太利國政府に依り任命せらるべき委員より成る混合専門委員會は遲滯なく開催せらるべきものとす

第五條 日本國、獨逸國及伊太利國は前記諸條項が三締約國の各とソヴィエト聯邦との間に現存する政治的狀態に何等の影響をも及ぼさざるものなることを確認す

第六條 本條約は署名と同時に實施せらるべく、實施の日より十年間有効とす

右期間滿了前適當なる時期に於て締約國中の一國の要求に基き締約國は本條約の更新に關し協議すべし

目次

前篇

第一章 戦ひの時代……………一三

一 アジア戦争

- 1 東亞新秩序の戦ひ……………一三
- 2 支那事變からアジア戦争へ……………一六
- 3 先づ餓ゑたる支那に與へよ……………一六
- 4 白人の不當勢力を一掃せよ……………一八
- 5 日支の心からなる提携……………二〇
- 6 同盟關係を前提とす……………二一
- 7 解決は目的の貫徹……………二二

8	聖戦に失敗なし	二二
9	日支は協力してアジア戦争を戦へ	二四

二 ヨーロッパ戦争

1	東西兩戦争の相互連関性	二六
2	デモクラシーの爲めの戦争か	二七
3	寡頭金権派の挑發したる戦争	三一
4	アジアの運命に至大なる關係あり	三三
5	アメリカの即時参戦は疑問	三七
6	對日戦も目前は困難	四〇
7	イギリス没落後の戦争	四一
三 戦ひの時代		
1	アメリカの誤算	四二
2	アメリカの偽裝中立	四三
3	長期世界戦は必至	四四

4	世界觀の戦ひ	四七
5	先驅者日本の姿	五一
6	皇道に即して戦ひ抜け	五二
7	より高きものへの建設戦	五二
8	必勝の確信	五三

第二章 世界戦争の後に來るもの

一 アジアの役割

1	世界戦争の現實	五七
2	勝敗を決定するもの	六一

二 世界戦争と新世界

1	世界新分野の確定	六四
2	アメリカの参戦は必至	六七
3	獨伊とイギリスの地位	六九

4	世界の四大ブロック	七二
5	舊秩序の最後の牙城	七三

1	世界史の劃期的轉換	七七
2	明日の世界	八一

第三章 明日の世界へ發足す

1	新秩序による世界平和の創建	八七
2	歴史の要請を實踐する適格者	九〇

1	相互信頼に基く世界新秩序條約	九三
2	世界新秩序の理念	九六

3	日本新秩序の原則	九九
4	フンク聲明の意義	一〇二

第四章 三國條約の世界史的意義

1	全體主義——三國共通の根本思想	一〇五
2	復古運動——史上未見の大變革	一一一
3	自由主義と全體主義	一一二
4	日本の傳統とナチ的なるもの	一一七

1	自給自足の大地域經濟	一二一
2	ヨーロッパの自給自足圏	一二三
3	大東亞の共榮圏	一二六

第五章 同志國家の血盟

1	全體主義——三國共通の根本思想	一〇五
2	復古運動——史上未見の大變革	一一一
3	自由主義と全體主義	一一二
4	日本の傳統とナチ的なるもの	一一七

第六章 日獨伊世界再建の原理

1	全體主義——三國共通の根本思想	一〇五
2	復古運動——史上未見の大變革	一一一
3	自由主義と全體主義	一一二
4	日本の傳統とナチ的なるもの	一一七

第七章 新秩序と日本の將來

1	自給自足の大地域經濟	一二一
2	ヨーロッパの自給自足圏	一二三
3	大東亞の共榮圏	一二六

1 日本の發展的大機 一三九

2 視野の擴大を要望す 一三二

第七章 日獨伊同盟と新體制 一三五

第八章 國防國家體制を確立せよ 一四一

一 何故に國防國家を必要とするか

1 國防國家のための新體制 一四一

2 國防國家の全體性 一四三

3 「國力」の新しき定義 一四〇

4 日本に迫る全體戰爭 一四四

5 全體戰爭、全體軍備の實體 一五六

二 如何に國防國家體制を完成するか

1 英米依存を脱却せよ 一四〇

2 自給要素は憂ひなし 一六二

3 價値理念を轉換せよ 一六三

4 今日惱みなき國家なし 一六八

5 國防國家即日本の革新たるべし 一七二

第九章 生産力擴充第一主義 一七五

一 國防力の完備と近代戰の特質

1 國防國家と日本の軍備 一七五

2 近代機械化軍の特質 一七九

3 人的素質と近代機械化軍 一八三

二 新經濟政策を提唱す

1 生産の三要素 一八六

2 勞働力と技術に不安なし 一八七

3 原材料は地下にある 一八九

4 資本を新たに創造せよ……………一九〇
 5 将来の富を代表する貨幣……………一九二
 6 皆んなを富ませよう……………一九七

三 戦争は富の生産より

1 戦争は生産事業だ……………二〇一
 2 國體の本義に還れ……………二〇三
 3 要は世界觀の一變にあり……………二〇四

後篇

興亞奉公日に際し内外時局を語る……………二〇九
 世界と日本……………二一四
 ボーア教授歓迎の辭……………二四七
 外交辭令……………二五〇

全體主義と人民戦線……………二五四
 日本の使命……………二六九
 大陸政策の世界史的意義……………二七七
 真日本の外交……………二八八
 南進に於ける日本の地位……………二九九

編輯の後に(三島康夫)……………三三一

前
篇

第一章 戦ひの時代

一 アジア戦争

1 東亞新秩序の戦ひ

支那事變の當初から、戦争の相手は支那よりは寧ろその背後にあつて之を操縦する敵性諸國であると云はれたのであるが、事變三年有半後の今日になつては、いよいよその事は一般に周知されて來た。國內にさしも反對の強かつた日獨伊同盟が遂に成立を見たのも、支那事變を通して英米の敵性が日本國民の骨身に沁み込んだ結果、ヨーロッパの戦争とアジアの戦争とが、その本質を同じうするものであり、三

國は共同の敵と戦つてゐるものであることが明瞭となつたからである。

從來日本の政府はこの事實を知りながら、之を直視し之を直言することを避けて來た。事變解決が今日の遷延を來したのは専らこの爲めである。既に獨伊と盟約を結び、日本が世界の新舊兩勢力の何れを敵とし何れを味方とするかを鮮明にした以上、今こそは、支那事變のさうした性格を大膽率直に把握し、それに基いて行動すべきである。そして、その觀點から、何よりも先づ事變解決の條件をこの際再検討する必要がある。

これまで日本の事變目標は、日支親善、經濟提携、共同防共であると云はれた。互に境を接し、所謂唇齒輔車の關係にあるアジアの同胞が、相食み相鬩ぎ、何年経つても此の極めて公正なる條件の下に、何故和平が出来ぬのであらうか。之は第一に支那側は勿論、日本の側に於ても、從來眞のアジア的自覺に缺けてゐたからではあるまいか。支那の指導者等が敵性第三國の策動に踊らされて、アジアの叛逆者としての役割を演じて來たのは素より許すべからざることであるが、我々の態度にも

多分に責むべきものがあつたことを認めなければならぬ。支那の一般は過去數十年に及ぶ日本の行動こそ、却つて非アジア的であり、西歐帝國主義の蠶みに倣つて、白人と共に支那を侵して來たと感じてゐるのである。今次の事變に、日本は未だ率直にその本來の心情を内外に向つて語つてゐない。若し事變の當初に於て、日本の欲する所は、支那を白人の侵略から救ふことである、支那の半植民地状態を清算することである、日本は支那に於て白人と共通に有するその一切の特權を抛棄する、と言ふたならば何うであつたらう。支那から、白人の不當なる勢力を一掃することのみが日本の念願であり、自らは何物をも求めないと大膽に聲明したならば、事變は忽ちにして解決し得たではないだらうか。勿論當時の國際情勢に於ては、日本としてそれまで赤裸々にアジア的意識を表明することは困難であつたらう。東亞の新秩序といふ抽象的な表現を以て之を暗示するに止めたのは已むなきものがあつた。

2 支那事變からアジア戦争へ

さりながら今日は世界の形勢が一變して來た。その一變したる環境の下に、日本のプログラムも大いにその視野を擴げて來たのである。東亞の新秩序は「大」東亞の新秩序となり、日滿支のブロックは更に東南アジアの廣き領域をも包含する大東亞共榮圏の思想となつたではないか。問題は既に支那の解放を通り越して、アジアの解放となつた、アジアをアジア人の手に取り戻すことが主たる目標となつた。茲に於てか支那事變に對する我々の考へも當然一變せらるべきである。日滿支のみを見詰め、この範圍に於て今後の問題を解決せんと志したる當初の理念は大いに擴大されなければならぬ、と同時に細目に涉る事變解決案もまた見直す必要がある。

3 先づ飢ゑたる支那に與へよ

日本は從來支那に對して領土も賠償も求めない、ただ經濟提携を欲すると云つて

來た。固より經濟提携は相互主義であり、日支共に之に依つて利益すべき建前であるが、戰敗國の支那としては、そこに多大の危懼を感じるは無理からぬことである。彼等が日本は經濟的に支那を侵略せんとするものと考へたとしても必ずしも怪しむに足らぬ。又實際に於て資源の乏しい日本としては支那の物資に恬淡ではあり得なかつた。日本の一部に過當の期待を懷く者の存したことも事實である。そしてこの點に關する支那側の疑惑が事變解決を困難ならしめたことは争へない。もともと國は貧國であり、食物さへも充分に持たぬ支那に對して、日本が物質上の期待をかけることが聊か無理なのであるが、今や東南アジアの豊穰なる地域が、日本のみならず支那の爲めにも開放されるとなれば、兩國の經濟問題は同時解決が可能となり、日支の融和は南方アジアを媒介として容易に齎らされ得るわけである。之は實に支那の民衆に取つては、これまで夢想だもしなかつた福音でなければならぬ。「心臓に達するには胃の腑から」と云はれる。日本から見ても大切なものは支那の「物」ではなくして「人」である、とは我々の持論であり、從來政府の聲明にも日本の欲す

る所は日支の提携親善であると繰返し述べられて来たのであるが、皇道精神や八紘一宇の高邁なる理想は、支那の一般民衆には未だ之を受け容れる能力も餘裕もない。彼等の心をつかむには、物を與へるに越したことはない。然るに今や餓ゑたる支那から奪ふに非ずして之に與へると云ふのであるから、南方アジア解放といふことが、支那事變解決を容易ならしめることは疑ふの餘地がないのである。英米敵性國家が、日本の南進政策に支那が共鳴して簡単に日支和平の出來上ることを極度に警戒してゐるのはこの爲めである。

4 白人の不當勢力を一掃せよ

事變は既に三年半に及び、日本は大なる犠牲を拂つて來た。殊に忠勇なる將兵十數萬の貴き生命が失はれたことは誠に償ひ難き損失であつて、事變の解決を輕々に考へることは嚴に戒めなければならぬは勿論である。また今日、我方がいかにも和平を欲するが如き様子を示すことは、重慶をして日本窮せりとの誤つた考を持たす

虞もないではない。

併し乍ら冷靜に考へると、支那事變は今最早や明らかたその目的を達したのであるまいか。當初から日本の目指す所はアジアの獨立であつた。外交上の考慮から今までは露骨には云へなかつたが、支那から白人の不當なる勢力や策謀を一掃することであつた。而して、之は誰よりも支那自身の最も欲する所であり、日本にしてその實力と決意とを示す限り、固より支那側は喜んで日本の援助に縋り、之を實現せんとするであらう。南進せんとする日本から見れば支那の解放は當然過ぎることであり、それはもはや既成の事實でさへもある。今後日支の提携が成り、結束が固められるに於ては、敵性白色人種が再び支那にその不純なる勢力を盛り返すことは考へられない。

歐米人の陰謀さへ封ずれば支那が將來日本に背くといふことはあり得ないのであるが、假りに、そこに多少の不安ありとするも、今後日本が急速に結成すべき實力を思へば、何等の危懼を要しない筈だ。事變の當初われわれは、將來の保障として

支那の裁兵を主張した、また一定期間の駐兵をも併せ唱へたのであるが、今日はその必要もないと思ふ。日本は今後短日月の内に國防國家の完成を期してゐるのであり、これは何處を何うしても爲し遂げなければならぬのである。而して之が出来れば、今日の支那の兵力の如きものは問題とならず、單なる警察力の程度に過ぎぬものとなるのであるから、この實力の比較を前にして、支那が往年の排日を再びするが如きは考へられない。大東亞新秩序の根本觀念から見てもこのことは當然なのであつて、指導國家日本にそれだけの實力と自信がなくてはならぬ。

5 日支の心からなる提携

事變前の排日毎日の執拗さは、日本人からすれば甚だ不愉快な記憶である。感情から非一度は膺懲を加へねば、腹の蟲が治まらなかつたのであるが、それは三年半の戦争によつて十二分に充たされた。支那の指導者等が政策を誤まつた爲めに無辜の民衆が云ひ知れぬ慘苦を嘗めさせられたことに對し、日本人は何人も心から憐憫の情に堪へぬのであつて、事變の結果として支那の政治が正道に立ち返り、國民大衆の生活水準が高まり、福祉が増進され、戦争の犠牲が無益ではなかつたことが支那人にも分つて、戦争の悪夢がきれいに拂拭され、日支の心からなる提携が可能となることこそ、事變解決の眼目でなければならぬ。

6 同盟關係を前提とす

日支の和平は、大アジアの建設、即ち東南アジア解放の運動に兩國が合作するといふ建前であるから、自然一種の同盟關係を前提とする。共同防衛の爲めは一切の措置もそのうちに含まれる。日獨伊の盟約に支那の加入することも考へられる。物資の相互融通も、日本による軍事基地の使用等の問題も、さうした關係から自然に解決されて來るであらう。

7 解決は目的の貫徹

三三

要するに日獨伊同盟を締結することによつて從來の英米依存の觀念を一擲し、アジアの自給自足經濟圏を確立するの大方針に邁進せんとする日本は、支那事變その者に就ても、この新しい國是に照して、謂はば再出發をしなければならぬ。事變目的を變更することでもなければ、況んや事變の「打切り」といふやうなことでは勿論ない。事變は飽くまで完遂するのである。擴大せられたる形に於て完遂するのである。目的は何處までも貫徹するのである。今までよりも、更に大なる目的を貫徹するのである。ただ自分の提唱したいのは、何を事變の完遂といひ、事變目的とは煎じ詰めれば何であるかに就て、面目の改まつたる國際環境と日本の新國策とに照應して、この際、更に透徹したる再吟味を遂ぐべしといふのである。區々たる面子や感情に捉はれてはならない。日本も支那も、眞に大アジアの自覺を喚起すべき秋だ。重慶の政治家等は、或は未だ世界の大局に自ざめず、歴史の意義を正解し得

ずして、依然英米依存を續け、デモクラシイ側が最後の勝利を得るものと誤信し、大處高所からする日本の提言に耳を傾けぬかも知れない。併し乍ら我方が出来得る限りの雅量を示し、寛大なる條件を以て彼等に呼びかけるに拘らず遲疑逡巡して、この世界の轉機に取り残されんとするならば、それこそ支那の國民が蔣介石一味を相手にしなくなるであらうし、その時は日本も別に施すべき方策はある筈だ。何としても當方は戰勝國であり、實力の把持者であるから行き詰まることはないわけだ。大局的見地に立てば道は自ら通ずる、よろしく潤達の氣宇を以て、事變の急速處理に當るべきである。

8 聖戰に失敗なし

事變が意外に永引くといつて、弱音を吐くは禁物である、況んやかりそめにも事變の責任を云々する者あらば、斷じて許すべきでない。事變今日までの經過を以て失敗と見るか成功と見るかによつて、今後の處置に大なる差異を生ずるのであるが、

三三

抑々聖戦に失敗はあり得ない、皇軍の赫々たる戦績によつて遺憾なく我が國威の發揚されたのは勿論、東亞新秩序建設の聖業は之によつて大なる進展を見たのであつて、前にも述べた通り、支那事變に關する限り、實は既に略々目的は達成されたとも看做し得るのである。事變の成果を斯くの如く解してこそ始めてその速かなる收束をも口に出ることが出来るのではないか。反對に之を失敗と觀するならば石に嚙りついても成功せしめなければならなくなる。蔣介石相手に十年戦争などの言を聞くのは、さうした見方から來るのである。

9 日支は協力してアジア戦争を戦へ

我々の事變即時解決を提唱するのは決してこの戦争を失敗と見るからではなく、また日本の經濟力に對する一部敗北主義者の悲觀說に左袒するが爲めでもない。滿洲事變が不可避的に支那事變となり、日支の戦争がまた必然的にアジアの獨立運動にまで發展すべき歴史の約束を信ずるが故である。支那事變に於て滿洲國が日本に

協力した如く、南方の解放運動に支那が日本と行動を共にすることが、最も自然であり、八紘一字の大精神は、常にさうした形式と性格を具ふべきであると考へるからである。

三年有半の戦禍の後を承けて、支那の再建は實に容易ならぬ難事業である。而もこの創痍を癒やし、更生の實を擧げしめるために、從來の形式方法に於ける英米の援助は期待出來ず、またそれは許さるべきでもない。支那はいやでも日本の協力と指導とに待たなければならぬ。この世界戦争の大破壊の後に必ず來るべき新秩序の線に沿ひ、日支は他の民族と共に問題をアジア大に考察し、解決しなければならぬのである。而して之は必然の勢であつて、事變清算に際して具體的に如何なる取決めを結ぶかと云ふことは、實は第二義的の問題である。法律的には日滿の關係は法三章に要約されてゐるではないか。要は支那が大東亞新秩序の建設に進んで協力するか否かにある。既に戦ひは支那から東南アジアへ舞臺を轉じて、全面的アジア戦争の段階に入らんとしてゐるのである。

二 ヨーロッパ戦争

1 東西兩戦争の相互連關性

前節に於て我々は敢て支那事變の目的が既に大部分達成されたと云つたが、之は事變以來強調された八紘一字の大理想が支那に於て實現されたといふ意味でないことは斷わるまでもない。八紘一字は肇國の聖謨であり、大和民族の大使命である。支那事變はこの久遠に亙る民族使命の遂行途上に於ける一段階であり、道標であつた。その限りに於ては既に與へられたる役割を果したと謂ふのである。我々は今正に新しき努力の段階に入らんとしてゐる、大東亞共榮圈の建設が即ちそれだ。

支那戦争は日本が單獨に戦つて來た、従つて單獨に終熄せしめ得る。併し次の段階に於ける我等の企圖は他との連關なしには考へられない。周知の通り大東亞の地

域に於ける新秩序の建設は、日獨伊條約に於て明かに謳はれてゐるが、これは獨伊によるヨーロッパの新秩序と密接な關係に置かれてゐることを示したものであつて、アジアの戦争とヨーロッパの戦争との相互連關性はこれに依つて一段とはつきりして來たと云はなければならぬ。ここに於て我々は今次ヨーロッパ戦争の性格と、その前途の見透しに就て改めて検討するの必要がある。

2 デモクラシイの爲めの戦争か

ヨーロッパ戦争の性格並に目的に關しては當事國の獨伊乃至英國よりは、却つて中立國たるべきアメリカに依つて端的に直截に述べられてゐる。ルーズヴェルト大統領は、最近の爐邊閑談及び議會教書に於て、一切の遠慮斟酌をかなぐり捨てて最も露骨に自由主義陣營の立場を代辯した、氏は先づ二十年前と同じ様に此の戦争をデモクラシイ擁護の爲めの戦争と斷定し、ヴェルサイユの罪惡の如きは論ずるの要なしと云ひて、デモクラシイが第一次世界戦争の後、人類平和再建の絶好の機會を

與へられ乍ら、完全に失敗した歴史に強ひて眼を掩はんとしてゐる。ただ何よりも先づ侵略者、獨裁者を打倒しなければならぬ、其の爲めにはアメリカは國を擧げて兵器廠と化する決心であると叫んだ。全體主義陣營に對する其のたしなみ無き誹謗、敵意と忿怒に満ちた語調は、アメリカこそ戦争の煽動者であり、「戦争業者」ではあるまいかとの感を懐かせるものがある、大統領のかうした言辭や國務長官その他の責任當局の聲明を讀み、厯大豫算を以てする物狂ほしいアメリカの再軍備と英國に對する援助の意氣込みとを見れば、今日アメリカは正しくヨーロッパ戦争の勸進元であり、或る意味に於ては既に戦争を其の手中に引取り、之を指導しつつあるとも云へる。

斯くの如きアメリカの代辯振りに引代へイギリスは、今日迄未だ戦争目的を明示してゐない。戦争の初期に於ては、又してもデモクラシーを口にしたが國民は一向に之に踊らないので、今は黙して語らずただ最後の勝利を高調してゐる。この前の戦争でもさうであつたが、由來デモクラシーを強調することを、イギリスの支配階

級は餘り好まぬ風がある。と云ふのは本來イギリスにはデモクラシーはない。中世以來の封建制度は曾て完全には清算されて居らず、主として少數の貴族財閥からなる所謂支配階級が政治を擔當して來て居り、國民大衆は實は多く與らぬのであるから、戦争に依つて彼等國民に絶大の負擔を課するに方り、デモクラシーを高聲に叫ぶことは雙刃の劍となり、戦後民衆の要求を抑へ得なくなる虞があるからであらう。

またそれはアメリカ國民に對する呼びかけとしても有效な手ではない。アメリカ國民の多くはイギリスを助けることがデモクラシーを擁護する所以であるとは決して首肯し得ないのである。今日アメリカ人に最も痛切に訴へるのは、さういふ抽象的な問題ではなく、一つには英國國民との血の繋がりに基く感情と、それよりも米國自身に對する直接の脅威こそ、彼等をしてイギリスの援助に狂奔せしむる最大の動機であると思なければならぬ。従つて大統領がデモクラシーを強調して國民を参戦に持つて行かうとする試みは、却つて反對の結果を生む可能性さへある。殊に支那を彼等の意味のデモクラシーと呼ぶに至つては、正しく言葉の濫用であつてアメ

リカに於ても眞面目には受取られてゐない。

又大統領は好んで自由とか正義とか言ふが、イギリスのアイerlandや印度に於ける虐政、オランダ、フランスのアジアに於ける植民史を知るものには、之等の國を助け、その不義の富、不當の地位を維持させることが、どうして自由及び正義の擁護となるのか、甚だ了解に苦しむのである。若しアメリカにして眞に正義人道とか自由民権を念とするならば、印度を始めアジアの虐げられたる民族の解放をこそ率先して唱ふべき筈ではないか。アジアの我々から見て從來のアメリカの説教口調が、誠に空虚に聞え何等の興味を有ち得ないのは寧ろ當然である。思ふにイギリスの貴族政治の桎梏を逃れて新大陸に移り、人類は總て自由であり平等であるとの建前で新しい社會を創めたのが米國であつて、その後政治の性格は一變してゐるのであるが國民の大多數は今日も習慣からとは云へ正直にこの信條を守つてゐるのであるから、アメリカの政治家は二言目には是非ともデモクラシイや天賦人權を叫ばなければならぬのである。前大戰のウキルスン同様、今回のル大統領もこのアメリ

カ傳統のお題目を唱へてゐるに過ぎぬと言へばそれまでであるが、ウキルスンの時は、參戰までは決して「ギヤング」だの、狂人だの、と汚い言辭を弄ばなかつた。いよいよ獨逸を敵に廻して戦ふに及んで、始めて國民の敵愾心を煽る爲めに用ひ出したのが傳家の寶刀「デモクラシイ」の標語である、今の米國政治家の言動は前回參戰の直後に於けるアメリカの、あの昂奮のさなかにも見られなかつた激越なものである。遠方から見るとイギリスよりはアメリカが餘計敵意を發揮してゐるやうでもある。之は何故であらうか、前大戰前後に於けるアメリカの態度を目のあたり見て熟知してゐる我々には一寸了解し兼ねるものがある。

3 寡頭金權派の挑發したる戰爭

獨伊方面では戰爭前から、ルーズヴェルト大統領及びその周圍の人々を以て戰爭の眞の張本人であると云つてゐたのであるが、支那事變でいやと云ふ程アメリカ人から悪口を聞かされた我々は、他國の事に口を出すのは單に彼等の惡趣味であつて、

愈々ヨーロッパが戦争となれば急に溫和しくなるものと考へた。餘程英佛側が旗色が良くならねば決して戦争には入らぬものと観測してゐたのである。アメリカの國民大衆は今日と雖も七八割迄はたしかにさういふ氣持であるに違ひないと思ふのであるが、昨今の政治家連中の態度は餘りにも物々しいので、今回のヨーロッパ戦争の性格に對する樞軸側の見解を今一度考へて見なければならなくなつた。

その見方に依れば、この戦争はデモクラシイ諸國の民衆とは何の關はりもなく、少數の金權支配階級が無理に挑發したものである。英米佛等の諸國に於ては、名はデモクラシイと云ふも、政治の實權はユダヤ財閥並にこれと密接の關係を有する少數政治家によつて壟斷されてゐて、之等の人達から見れば獨伊全體主義の政治經濟の行き方は、不倶戴天の仇敵であつて、之が成功しヨーロッパの覇權が彼等の手に移れば、ユダヤ並にアングロ・アメリカ流の國際資本主義は立つ瀬がなくなる。何うしても之は打倒しなければならぬ、といふのが今回の戦争の起りであると云はれる。この説明で見るとアメリカの民衆は別として、ユダヤ系の政治家、財閥がデモ

クラシイ側の勝利に全力を打込む理由はよく分る。この前の戦争にアメリカを引入れたのは、同じく財閥であり、主として戦時利得を欲するウォール街の策動であるといはれたのであるが、戦後の二十年間に世界經濟の重心が米國に移り、ユダヤ系の勢力は著しく擡頭して來た。殊に世界の金の大部分がアメリカに集まつて、國際資本主義の本山として、アメリカは英國に取つて代つたのであるから、獨伊流の廣域經濟圏の思想、金本位制を否認する經濟體制が勝を占めて、謂ふ所の世界新秩序が現出するといふことになれば、英佛の金權寡頭政治のみならず、アメリカのさういふ支配階層は最も重大なる打撃を受けるわけである。

この見解からすれば、英米佛の支配者等は、初めから同舟の客であつたわけで、アメリカの富の力が最も大きいから戦争の勸進元となり、傍ら經濟戦面に協力し、英佛はそれぞれ海軍・陸軍を以て武力戦を擔當するといふことになる。かう見て來ると、今度の戦争に就て多くの疑問が釋ける。例へば、ソ聯を獨逸に抱き込まれた以上、兵力關係から見ても、英佛は到底戦争は出來ぬと一般に考へられたにも拘ら

ず、イギリスの外交が愈々となつて意外に強硬な態度を取つたことなども、背後にアメリカがある、今度こそ、必ず初めから大々的に英佛を助けるといふ確信があつたからではあるまいか。又既に一昨年夏の頃ルーズヴェルト氏が、米國の國境はフランスに在ると云つたのも、從來のアメリカとしては随分突飛なことで、一般に戦前からの大統領及びハル長官の日本や獨伊に對する言動には、甚だ露骨にして好戰的なものがあり、何としても英佛を奨励して是非とも戦争に持つて行かせようとした嫌ひがある。固よりドイツの實力過小評價といふことが根本であつて、今のうちならば比較的容易に樞軸國の打倒が可能と信じたからでもあるが、感情から云つても、利害からしても、ヒットラーに對するデモクラシー諸國特にそのユダヤ系の敵意は頗る強烈なものがあり、之が戦争の原因であると斷定することは、必ずしも牽強でも附會でもないのである。

果して然りとすれば、前大戰に於てイギリスがドイツに對して行つた宣傳は、逆にドイツからデモクラシー側に返上しなければならぬ。即ち、カイザーのドイツは

民衆とは何の關係もなく、皇帝及びプロシヤのユンカー軍閥がイギリスの富と勢力を嫉んで戦争を始めたと云はれたのであるが、今度は、獨伊側からイギリスの支配階級が民意を無視して、謂はれなき戦争を戦つてゐるのだと云つてゐる。

4 アジアの運命に至大なる關係あり

何れにしても現戦争の性格を斯くの如く見るならば今後の見透しは大いに變つて来るわけである。若しイギリスの國民とその少數支配階級が完全に一心同體となつて、眞に自由の爲め祖國の爲めに戦ふといふことならば、如何なることがあらうとも、英國民の大多數の住む本土を抛棄することは考へられない。本土が獨軍に占領された時は刀折れ矢盡きた時であつて、所謂城下の誓をするの外はないのであるが、之に反してこの戦争が俗に云はれる通りユダヤとヒットラーの戦争であり、國際資本主義と全體主義との戦争であるならば、英本土は重要ではあるが畢竟金權勢力の第一線に過ぎない。これが潰れたからと云つて戦争は決して終了しない。イギリス

の支配階級は國民を棄てて海軍と商船隊を出來得る限り取り纏めて、その植民地に
 移りアメリカの援けに依つて最後まで戦はんとするであらう。併し乍ら四千八百萬
 の同胞を敵手に委ねて果してよく戦ひ抜くことが出来るか何うか。第一、孤島に取
 り残された人々は誰れが養ふか。普通の國ならばさういふ場合は一寸想像が出来な
 い。併し有名なる外交評論家である米國のユダヤ人リップマンは、英本土が没落す
 ればイギリスは當然その海軍をアジアの英領に集中して、アメリカと一緒になつて
 日本を討つであらうと云つてゐる。之は我々として深く考へなければならぬ。獨伊
 と戦つてゐるのが、本當は英國民ではなくして國際資本閥であるならば、英本土が
 占領され、ヨーロッパ及びアフリカを獨伊に一任するの外なきに至れば、英帝國の
 他の部分、主として印度を始めアジア方面の領土が、ユダヤ的アングロ・アメリカ
 的勢力から見れば、その重要性を倍加することになる。搾取の對象を失つた資本主
 義は立つて行かない、アメリカを本據とする國際資本閥にとつては、ヨーロッパの
 みならずアジアからも締め出されては大變である。殊に獨伊樞軸に對して百年戦争

を決意するからは、南米及びアジアの物資を敵に拒むことは絶対に必要である。

反對にアジアの豊穡なる地域と十億餘の民衆を益々搾取し自らの物質力を増すこ
 とに依つて、獨伊に對し最後の止めを刺さんとするであらうことは明かである。ヨ
 ーロッパ戦争の性格を如何に見るかは、獨りイデオロギイの問題だけではなく、日
 本及び全アジアの運命に取つて重大なる關係を持つものであると云はねばならぬ。

5 アメリカの即時參戰は疑問

問題は専らアメリカ、特に其の國民大衆が何う出るかに懸つて來る。フランスは
 ドイツに屈服する前に、アメリカに呼びかけ、若しアメリカ國民がフランスの爲め
 に戦ふ意思があるならば、植民地に逃れても抵抗を續けるであらうと云つた。ドイ
 ツの電撃戦が餘りにあざやかであり、事の意外なるに度膽を抜かれたか、ルーズヴ
 エルト大統領は議會の承諾なくしては決定出來ぬと云つて斷わつた。イギリスの場
 合は何と云ふであらう。昨夏ドイツに依る英本土占領が不可避と見えた際、上院外

交委員長ピットマン氏は「その島を棄て、軍艦を持つて早く米大陸に逃げて来い」と云つた。萬一の場合イギリス海軍の處分に就ては、英米の間に約束があることだけはたしかである。併し、アメリカに安心を與へるだけの爲めに、海軍を保存し、之を持つてアメリカに寄食し、或は人口の少いカナダやオーストラリアに據つて、細々と暮しを立てるといふことでは、流石にイギリスの支配階級も、本土に残した國民に相濟まぬであらう。之は何うしても、アメリカが戦争を引受ける、樞軸國に對して飽くまでも戦ひ抜く、といふ言質を與へぬ限り、植民地落ちはやり兼ねるであらう。

アメリカがその約束をなし得るか何うか、勿論イギリスの敗戦ぶりにも依るであらう。海軍が何の程度に残るかが大きな要因となるに違ひないが、結局はアメリカ輿論の動向次第、といふよりは大統領以下が、それまでに如何に輿論操縦に成功するかである。政治家の多くは参戦に傾いてゐるやうであるが、國民は日本方面に傳はる所や例の輿論調査などは反對に、戦争回避が多數の意嚮のやうだ。殊にイギ

リスの惨敗を目の前に見、さうして氣の毒な四千八百萬のイギリス國民が謂はば人質となり、饑餓に泣くと聞いては、自信のない戦争にアメリカが乗り出す決意が出るか否か。アメリカに於けるウォール街の勢力、現政府の思想傾向を無視することとは出来ない。と同時にアメリカ國民の本能は、いよいよよとなると判断を誤らぬことをも考へなければならぬ。彼のウキルスンがヴェルサイユ條約を携へ凱旋將軍の意氣を以てヨーロッパから歸り、孤立派議員の反對の如きは一舉に粉碎して呉れるとばかり、國內行脚に乗り出したが、遂に上院に破れて、條約も國際聯盟も凡て御破算になつたあの當時を思ふと、アメリカの今日の軍備の程度では、如何にルーズヴェルト氏の聲望を以てしても、イギリス敗戦の後を承けて、日獨伊三國を相手に戦ふ決意を國民に強ひることは相當に困難ではないかと思はれる。現在イギリス援助熱が昂まつてゐるのは最後の勝利が可能であるか一般が考へさせられて來たからであつて、アメリカ自身が参戦しなければ勝てぬと云ふことならば問題は自ら別であるかも知れない。

實を云ふとアメリカの政治家も、ほんとにイギリスの勝利を信じてゐるかは大きな疑問である。また今日の状況に於ては、假令アメリカが参戦しても頽勢を挽回し得るとの確信は持てぬ筈だ。さればこそ、あの大童の再軍備をやつてゐるわけである。スチムソン氏が議會に於てイギリスに武器を與へるのは、之に依つて「時」を買ふ爲めだと述べたのは、正にアメリカの眞情を告白したものであらう。要するに再軍備の完成しない今日、アメリカがヨーロッパ戦争に果して参加するかは疑問であるとするのが正しいやうである。

6 對日戦も目前は困難

同じ理由に依つて、日本との戦争もまた、アメリカとしては目前は困難でなからうか。今や夜を日に次いで、自身の再軍備とイギリス援助に、猫の手も借りたい筈のアメリカが、日本と戦ふとなれば武器も船も悉く太平洋に用ゐなければならぬ。勢ひイギリス援助が出来ぬのみならず、現に持つてる海空軍をも減殺して、著しく

無力化するは必然であるから、之はなかなか出来ぬことと思ふ。

7 イギリス没落後の戦争

さうすると、假りにイギリスが今年夏秋の交、本土の守りを失ふとすれば、結果は何うなるか、固より何人と雖も的確なことは云へぬのであるが、恐らくアメリカはフランスの場合と違つて今度はイギリス援助を約束するであらう。大統領にはその権限はないのであるから、有效な約束は出来ぬ筈であるが、ルーズヴェルト政権は、今までも随分國民に祕して、イギリスあたりと色々密約をして來た模様であり、アメリカ自身の安全の爲めイギリス海軍を絶対必要とするといふ、立派な理由も立つのであるから、後日議會との悶着を覺悟で之は決行するであらう。いや既にその約束を與へてあるかも知れぬ。そこで、イギリス本土の没落は戦争の終了とはならぬといふ結論になるのであるが、然らばヨーロッパ戦争はその以後に於て如何なる様相を帯びるであらうか、之は改めて研究しなければならぬ問題だ。

三 戦ひの時代、

1 アメリカの誤算

現前の戦争が世界的の規模に擴大し、有史以來の大戦亂となるか否かは、主としてアメリカの今後の態度に懸つてゐる。前節にも述べた如く、再軍備が未完成の儘では、アメリカは參戰の決意は出来ぬ筈であるから、當分はイギリスに對して出来る限りの援助を與へるといふ現在の方針を續けるものと見られる。

今の所、日本に對しては色々と強硬な姿勢を示してゐるが、之を眞に受けるのは偶々彼等の術中に陥るものである。ドイツの實力を過小に評價した彼等は、日本に對しても、同じ誤謬を繰返さんとしてゐる。彼等は、支那事變に因る日本の疲弊といふことを過信し、ソヴェートと日本との關係に就ても頗る好都合な判断を下し、

また我が國內一部の親英米分子の勢力を過大に見積つて、日本は今日英米を向ふに廻して戦争することは到底出来ないと多寡をくくり、此際アメリカにして斷乎たる態度を装ふに於ては、日本は決して南方進出など敢てするものでないと獨り決めしてゐるのである。日本は固よりアメリカとの葛藤を求めらるものでないから、政府當局もその意味のことは先方に通じてあると思はれるが、彼等はまた之を以て日本の弱味を暴露するものと考へる。之は甚だ危険なことであつて、アメリカはその今日までの歴史に於て、いつも相手が弱しと見れば頗る積極的に出てゐる。三國同盟の一つの狙ひはアメリカをしてこの傳統的態度を執らせまい爲めであつた。獨伊乃至は日本の何れと事を構へても必然的に三國を同時に相手としなければならぬことをアメリカに警告するのが本同盟の一断面である。

2 アメリカの偽裝中立

アメリカ國民大多數の健全なる常識が信頼し得るものならば、實は斯くの如き條

約を待つまでもなく、アメリカの中立は期待し得るのであるが、今日彼の國に於て政治の實權を握る人々と國民大衆との間には、截然たる區別を立てて考へなければならぬ。孤立主義、アメリカ第一主義の國民大衆と、ユダヤ、アングロ・サクソンと利害を共にする少數分子とが對立して參戰、不參戰の大問題に就て互に争つてゐる現下の情勢に於ては、我々としても、アメリカの支配階級に民衆を引摺るべき好箇の口實を與へぬやうに細心の注意を要する次第である。

凡そ、一國の政治家が眞に國家民人の休戚利害を念頭に置いて大策を決定するならば、その出やうは大體豫見し得るから、相手としてもやり好いのであるが、少數政治家が國境を超えて、一味の利害感情から割り出して、國策を決定する場合にはその出處は到底常識を以て判断し難く、斯の如き國家を取扱ふには特殊の考慮を必要とするのである。今日のアメリカは或は斯くの如き國家に墮してゐるのではないかを恐れる。國祖ワシントンの遺訓も顧みられず、政治家の國民に與へたる嚴肅なる約束が何等の拘束力をも有たぬ現在の状態は、曾ての質實なるアメリカ氣質が著しく弱化したることを思はせる。

3 長期世界戦は必至

従つてアメリカが表面だけでも中立を守るといふのは、その軍備未完成の期間だけの問題であるとするのが安全だ。絶大なる工業力と無限の資源とを擁するこの國が、數年の後には歴大なる陸海空軍を作り上げることが必然であつて、一度その支配階級が、兩洋作戦に確信を持ち有るに至れば、今日の彼等の遲疑逡巡は一擲されて、全世界を敵とするも、敢然舊秩序の爲めに戦ふべきは想像に難くない。今日輿論が必ずしも彼等の意の如く動かぬのは、主として實力不足の爲め彼等自身が不安を抱くことに基因するものであつて、兵力に對する見透しさへつけば、ウォール街の黄金の魔力は大衆を主戦論に驅り立てることに大なる困難は感ぜぬであらう。米西戦争が糖業者の撒布したる五百萬弗の黄白に依つて一夜のうちに製造されたことを思へば、新聞、雑誌、ラヂオ、映畫、一切の宣傳機關を壟斷するユダヤ的勢力

がアメリカを戦争に追ひ遣ふことは、朝食前の仕事と云はぬまでも決して困難なことではないと見なければならぬ。

實は今日に於ても、アメリカ政府の肚は既に決まつてゐると思はれる。イギリスに武器を與へて聲援し、一日も永く持ち堪へさせて獨伊の勢力を消耗し、蔣政權に金を與へて日本を牽制させ、その間に史上空前の龐大軍備を整へて、疲弊したる日獨伊を一手に引受け、見事世界の舊秩序を勝利に導かんとの魂膽であることは、諸般の情勢に照して間違ひないやうだ。果して然りとすれば、イギリス對獨伊の戦争は必然的に世界戦争に發展し、ヨーロッパの舞臺だけでは到底収まらず、われわれは今後十數年乃至數十年に亘る「戦ひの時代」を覺悟しなければならぬ。凡そ人類の思想が劃期的の轉換を遂げる爲めには、常にさうした長期闘争を必要としたのであつて、畢竟之は人力を以ては如何ともし難いのである。

4 世界觀の戦ひ

現前の戦争が性格を同じうする大國間の争覇戦であるならば、問題は寧ろ簡單であるが、さうではなくて宇宙人生に對する根本の態度、謂ふ所の世界觀を異にする國々の間の死闘であるが故に、何れか一方が勝ち終せるまでは、之は結末を告げぬものと見なければならぬ。日本に於てはこの世界觀の問題が、國內の政治經濟の體制に直接間接の影響を持つが故に、今日の世界變局をイデオロギイ的に見ることに強く反對するものがある。併し之は世界史に對する態度として根本的誤謬である。日本自身の東洋に於ける活動に對しても、また今次のヨーロッパ戦争に對しても、一部の日本人特に有力なる階層が問題の核心を掴むことを拒んで來たが爲めに、國家の政策が本來の軌道に乗らず、謂はば空廻りをしてゐたのは顯著なる事實である。思ふにイデオロギイなどと西洋の言葉を用ゐるが故に、直ちにマルクス主義その他非日本的なるものと混同し、頭から之を排斥せんとするのであらうが、大切なこと

は、言葉ではなくして實質である。

5 先驅者日本の姿

實質から見れば、世界維新の運動が先づ旗擧げをしたのは、十年前の滿洲事變並に之と前後して日本國內に起つた昭和維新の要求ではないか。現前の「戦ひの時代」は實に日本に依つて、東洋に於て、その端を發してゐるのである。イデオロギ―を論ずるならば、今日の世界新秩序の理念は悠久二千六百年の昔、否邇つて天孫降臨の太古の時代に於て始めて地上に宣布されたる永遠の眞理そのものではないか。徒らに當面の戦争の長期化をのみ恐れ、そのイデオロギ―性を強ひて無視せんとするが如きは、寧ろ最も非日本的の心構へとして強く指彈されなければならぬ。

滿洲事變に於て、世界の現状維持陣營に對して敢然反旗を翻し、聯盟脱退に依つて背水の陣を布きたる日本は、支那事變を迎へて愈々八紘一字の民族使命實踐の大道に乗り出したのであつて、如何なる困難に遭遇しようとも、最早や後退を許さぬ。

事變三年半の實驗に徴するも、世界舊秩序勢力との妥協苟合の餘地は寸分も之れなきことが明々白々となつたにも拘らず、國內の舊體制分子は、この大勢に眼を開くことを肯ぜず、依然として過去の因縁に囚はれ、英米舊秩序勢力に未練を残し、内治外交の刷新轉換を阻んで來たのが、昨日までの日本の姿であつた。否々、因襲の久しき、浸潤の深き、既に日獨伊同盟の締結を見、長くも大詔の渙發を拜したる今日に於ても、尙ほ且つ左顧右眄、百方國家の革新的前進を牽制せんとするの策動はその跡を絶たぬのである。

6 皇道に即して戦ひ抜け

「戦ひの時代」に臨む大和民族は何よりも先づこの内部の矛盾を清算しなければならぬ。今日の世界の對立は、獨伊の全體主義と英米の個人主義との夫れである。而して所謂全體主義なるものは、その最も醇乎たる形に於て、開闢以來の皇國日本の根本精神として傳はり來りたることは、われわれが後章に於て繰返し力説する所

である。獨伊の政治體制が英傑ヒットラー、ムッソリーニの個人的獨裁に負ふ所尠くないのは否定し得ないが、これはむしろ偶然の事實であつて、之に依つて、獨伊の政治理念が從來の個人主義的世界觀に比して著しく日本的色調を帯ぶるものであることを認めまいとするのは斷じて誤りである。日本の歴史、日本の國體は他の追従を許さず、地上唯一絶對のものであることは固より問題はないが、我々が便宜上日本を全體主義の範疇に數へるからと云つて、我々の國體觀念を云々するが如きは甚だ迷惑である。國內の革新は一に國體の明徴に俟たねばならぬことは勿論だ。然らば今日まで日本國體を晦暝ならしめたものは何であるか、一言にして云へば自由主義、個人主義の西洋思想ではないか。この惡思想を世界の舞臺に於て克服せんとしつゝあるものが、獨伊の全體主義であるならば、日本の革新運動が、それと並行の線を辿るべきことは自然である。三國同盟の必然性も亦、ここに存すると云はなければならぬ。

個人主義的、自由主義的世界觀に對する鬭争、これこそ新秩序運動の根本性格であるが、國內體制に於ては獨伊が我に一步を先んじてその政治、經濟、文化の各分野から、一切の舊きものを清掃し、逸早く新時代に處すべき國防國家的、總力戰的の姿勢を整へた。日本は對外的には新十字軍の先驅をなしたのであるが、國內體制は依然たる舊秩序の殘滓を多分に存して、未だに生みの惱みに苦しんでゐる。漸く外交の轉換は遂げたるも、國內新體制は出漚つて、首尾一貫せぬのが目前日本の姿である。

その間にも歴史は容赦なく與へられたる軌道を駛り、時代は徐々に展開して行く、不可抗の力を以て展開して行く。この大勢を前にして、われわれは滿ち來る潮を堰き止めんとした古の王者の愚を學んではならない。牢固たる信念を以て、大膽に、勇敢に、「戦ひの時代」を戦ひ抜かなければならぬ。一億一心も、臣道實踐も、單なる標語であつてはならない。單なる形式であり、表皮であつてはならない。今日の世界は、内も外も、妥協苟合を許さぬ。何よりも、本質的なるものに目醒め、舊秩序の虚偽なるもの、邪惡なるものは徹底的に排撃されなければならぬ。新しき秩

序はそれに依つてのみ生れ得るからである。

7 より高きものへの建設戦

「戦ひの時代」は單なる破壊の時代ではなく、實は大なる建設の時代である、世界的建設の時代である。ただ新しきものが生れ出づるためには舊きものは破壊されなければならぬ。目前は専ら建設の爲めの破壊が表面にクロース・アップされてゐる。アジアの戦争がさうでありヨーロッパの戦争もそれだ。今後アメリカがいよいよ交戦國として登場するならばその破壊は益々擴大されるであらう。併し乍ら之を以て人類文明の破滅であるなどと考へるのは、歴史の必然を無視するものであつて、反對に寧ろ文明そのものが大なる飛躍を遂げる爲めの必要なる過程と見なければならぬ。尤も血を流しての戦争だけをわれわれは論じてゐるのではない。アメリカが法律上交戦國となるか否かのみが實は重要なのではない。思想的、經濟的にはアメリカは當初から參戦して居り、今後も地理的關係を考へるならば、アメリカと樞

軸側とがいよいよ公然交戦關係に入るとしても、實際火花を散らしての武力戦よりは、寧ろ思想的、經濟的の長期抗戦をその特徴とするであらう。日米の場合もまた大體同じではあるまいか、世人は日米戦争と云へば直ちに血腥き武力衝突を想起する、固よりその覺悟を以て萬全の準備を爲すことは必要であるが、それよりもさらに緊要なのは長期戦、持久戦の構へである。

「戦ひの時代」の結論が世界新秩序に在りとするならば、持久戦の覺悟は當然であるのみならず、この長期戦の過程に於て、到る所政治、經濟、文化の一切に互つて、自ら舊秩序は滅び新秩序の生れることが期待される。これが今次戦争の特色であつて、勝者に依る領土併合乃至賠償金の要求ではなく、敗者側の新秩序承認を以て、戦亂の時代は幕を下ろさなければならぬ。アメリカの物質力の表皮のみに着目するものは、米大陸に新秩序を豫想するが如きは痴人の夢と云ふであらう、併しそれは時代の動きに盲目なるのみならず、アメリカに於ける内部の兆しにも氣のつかぬ者の言である。目前アメリカ人の多くは戦争景氣を楽しんでゐる。あのヒステリ

ツクな軍備と、そして他大陸との經濟交通の斷絶とが、明日如何なる影響を彼等に齎すかも考へずに、只管今日を謳歌してゐるが、數年前の大恐慌に際して、アメリカ人の多くが如何に彼等の經濟機構、政治組織そのものに對して、深刻なる疑惑を持ち出したかを目撃した者には、この世界動亂が結局に於てアメリカの社會革命を以て大團圓となることも、決して考へられぬことではない。今日アメリカに於て、國民を戰爭に驅り立てんとしつあるユダヤ的金融財閥は斯くして自らの墓穴を掘つてゐるわけであり、その結果國民大衆は一時苦難を蒙るとも、終局に於ては、より善き秩序を内に迎へることが出来るであらう。

8 必勝の確信

歴史を通じて「戦ひの時代」は、常に、より高次なる時代の前驅である。今次戰爭に於ける全體主義陣營の強味、彼等が必然勝ち抜くべき理由は實に茲に存する。この大動亂の後に新しき秩序が生るべきことは最早や議論の餘地がない。現状を維

持せんと欲する民主主義陣營に於てさへ既に戦後の新秩序を云々してゐる。ただ彼らの新秩序は、名は何と呼ぼうとも、實質に於ては歴史の逆行であり、ヴェルサイユの失敗をさらに大規模に、徹底して、繰返すであらうことは間違ひない。苟も人類の前途に信仰を有するものから見れば、さうした可能性は考へられない。自由主義、個人主義の行詰りによつて、招來された今日の戰爭が、結局に於て單に人間社會に無盡の犠牲と慘害とを強ひたに止まつて、在來の不合理、不正義が少しも是正されぬのみか、却つて増長するといふが如きは餘りにも大なる悲劇ではないか。目前兩陣營の勢力の比較を論ずるまでもなく、人類社會の進化の理法からするも、今回こそは、新興勢力の勝利、舊勢力の没落は必然であり不可避であることを我々は信じて疑はぬものである。(皇紀二千六百一年二月)

第二章 世界戦争の後に來るもの

一 アジアの役割

1 世界戦争の現實

ヨーロッパの戦争は、いついかに落着するか、果してヨーロッパ戦争で終るか、それとも世界戦争にまで發展するか、いまや全人類の關心は悉くこの問題に集中してゐる。

この戦争が單に英獨の爭覇戦、すなはちヨーロッパの大陸を誰が支配するかの戦争であるならば、その勝敗は重要ではあるが、事は甚だ簡單であり、實はすでに問

題は決定されてゐる。イギリスとしては、大陸においてドイツを破り、イギリス的秩序を強制するの望みは最早や絶無であるから、率直に敗北を認め、大陸から手を引き、今後は専ら海上帝國を守るといふ決意をさへすれば戦争は一應梟となるわけである。ドイツは昨夏フランスを破つた後、その趣旨の提議を試みたのであるがイギリスは頑としてこれを聴きいれなかつた。かくして當初はヴェルサイユ體制の改訂を目的とした戦争が、中途において英佛對獨伊のヨーロッパ争覇戰と變り、今日では遂に全アングロ・サクソン帝國と、獨伊の率ゐるヨーロッパとの死闘と化してしまつたのである。

戦争が今後如何なる経過を辿るべきかは、もとよりの確なる豫測を許さぬが、バルカン、近東及び北アフリカをはじめ、地中海をめぐる全地域からイギリスの勢力が一掃されるのは、近き將來のことではないかと思はれる。然る後いよいよ獨伊側が全力を傾けて英本土を攻撃することは勿論であらうし、その結果についても多く疑問は無いやうである。したがつて問題は英本土の攻略が可能であるか、またそれが

が何時實現するかではなく、それによつて果してこの戦争に終止符を付し得るか否かであると見られる。

イギリスの政治家は、假りに本土が守りを失つても、植民地に據り、アメリカの援助を以て、最後まで戦ひ抜くと言つてゐる。これが單に彼らの決意の牢乎たることの形容詞であり、特に日本の南進に對する威嚇の意味を多分に含ませるつもりならば了解も出来るが、四千八百萬の全國民を敵手に委ねて、なほかつ植民地の爲めに戦はんといふに至つては驚かざるを得ない。普通ならば國民あつての國家であるから、國民の大部分が謂はば人質になつては戦争の目標は無くなるわけであるが、イギリスの支配階級が本土を追はれても戦ふといふならば、それは一時國民に苦痛を忍んで貰へば最後には頽勢を挽回し得るといふ確乎たる成算がなければならぬ筈である。

彼らにさうした成算があるであらうか。今日彼らがけなげなる防戦を續けてゐるのは一つにアメリカに依存してのことである。アメリカの援助が止めば、その瞬間

に屈服するのほかなきことは彼らも公言してゐる。しからばアメリカは注文通り彼らと共に戦ふであらうか。戦つたとしても、英本土を奪還し英國民を救出し得るであらうか。今日アメリカが大童になつてイギリスを助けてゐるのは、スチムソン氏の言ふ通り「時」を買ふためであるかも知れない。自分の備へが出来までの間、イギリスに持ち堪へて貰ふ爲ならば、イギリスの政治家も餘りに多くの望みをアメリカに掛けることは出来ぬわけだ。アメリカはかつて没落に瀕したフランスの切なる要求を斥けた。イギリスの場合どうなるか、ヨーロッパ戦争が世界戦争になるならぬかの鍵はここに在る。

戦前から、英佛を聲援し激勵して、彼らの戦意をかためさせたアメリカ、世界の自由主義陣營から最後の頼みの綱と仰がれるアメリカ、そして現に事實上戦争の勸進元となりこれを指導してゐるアメリカとしては、大事の瀬戸際にいたつて身を退くことは困難ではあるまいか。すでにあまりに深入りし過ぎてゐるともいへる。輿論の反戦的傾向を過大に評價してはならない。イギリスにおいては勿論のことアメ

リカにおいても、民主政治が輿論政治であつた時代は過去に屬する。上院の討論とか輿論調べとか、例のデモクラシイについて廻る所作事に餘り關心を持つことも誤りである。國民の健全なる判断が物をいふならば、英佛がこの戦争をやらなかつたであらうし、イギリスがヨーロッパで敗れば、それでお仕舞ひとなるべき筈だ。しかるに民主主義諸國の政治がいゆる金權寡頭政治に墮してゐることは何と云つても事實である。その意味において英佛とアメリカの支配的勢力は一つであり、アメリカは初めから戦争に参加してゐると言つても過言ではないのであつて、少くもルーズヴェルト大統領以下の肚は、すでに参戦に決まつてゐると見るのが正しいであらう。

2 勝敗を決定するもの

しかしながら英本土が攻略された曉においては、アメリカの戦争参加は頗る奇妙なる性質を帯びるであらう。英佛合同の力を以てしても破り得なかつた樞軸國を、

敗残のイギリス勢力を援けて、アメリカが打ち負かすといふことは一寸考へられな
い。アメリカの参戦は、英國政治家にその海軍を取り纏めて、植民地落ちを決行す
べき口實を與へる爲の已むなき處置であらうから、ヨーロッパにおいてドイツと武
力戦を戦ふことは、その本旨でないに違ひない。ヨーロッパから閉め出されること
はもはや覺悟の前で、このうへはせめてアジアに於ける英帝國の殘存部分を死守さ
せ、アジア十億民衆の搾取を續けることに依つて、國際資本主義の餘命を保たうと
いふのがアメリカの眞意でなければならぬ。謂はばアメリカのイギリス併合であり、
さらに露骨に云へば英米資本閥の合體である。さうなれば氣の毒なのは孤島に取殘
されて飢ゑに泣く四千八百萬のイギリス國民であり、迷惑至極なのは、虐げられた
るアジア十億の弱小民族であらう。

かくの如き厚顔無恥なる取引を世界の輿論と人類の良心とが許すであらうか。こ
れはあまりに極端なる想像であるといふかも知れない。併し、植民地に據つて望み
なき戦ひを續けるといふのがイギリス政治家の本心であるならば、この結論を脱れ

ることは出來ない。またすでに西半球におけるイギリス領土を取得して國民の歡心
を迎へつつあるアメリカの政治家としては、ヨーロッパ戦争介入を國內輿論に是認
せしめる爲には、イギリスの海軍とそのアジア植民地とを入手することが、アメリ
カ自身の安全と繁榮との爲め絶対必要であると説くのが最も俚耳にはいり易い。

もちろん英米の政治家は、デモクラシイの爲め、正義と自由と「法の支配」の爲
め、獨裁者、侵略者をあくまでも打倒するのだと云ふであらう。そして、海軍力の
優勢を誇る彼らは、南北アメリカとアジアの資源をもつて、物資不足に悩む獨伊の
ヨーロッパを、長期經濟戦によつて屈服させて見せると豪語するに違ひない。これ
はまた獨伊としても油斷のならぬ點である。ヨーロッパからイギリスの勢力を驅逐
し、アフリカを手に入れたとしても、決して、彼らは安易なる氣持ちで新秩序の建
設に専念することは許されぬであらう。一度、アメリカと交戦關係に入れば、必然
的に長期戦争を覺悟しなければならぬ。それは主として彼の全體主義經濟と英米の
金融資本的經濟と、何れが勝つかの經濟戦争であるだけに、物資も恵まれ、人口の

稠密なるアジアの領域が、何れの陣營に荷擔するかによつて勝敗は定まると見なければならぬ。

獨伊が盟邦日本による大東亞共榮圈を祈るのは、これが爲めであり、英米がヨーロッパの重大危機の最中にも、東南アジアに異常なる關心を示し、日本の南進を是非とも喰ひ止めんとするのも、かうした關係があればこそである。世界新秩序の建設にあたり日本の役割は實に重大であると云はねばならぬ。

(皇紀二千六百年「讀賣新聞」三月十日號掲載)

二 世界戦争と新世界

1 世界新分野の確定

日獨伊三國條約の締結によつて、アジアの戦争とヨーロッパの戦争との相互聯關

性は一段と明瞭になつた。それは單に、日本も獨伊も、英米といふやうな共同の敵性國家と對立してゐることが一般に認められて來たと云ふのではなくして、之に依つて、日本と樞軸側とが、條約前文にも謳はれてゐる通り、共通の崇高なる理念に基いて行動してゐるとの自覺が深められたからである。

三國が、東西に分れて、別々に活動してゐた間は、その動機、目的に關し、從來の戦争と區別することが稍々困難であつた。即ち、ヨーロッパの戦争は、英佛と獨伊との爭覇戦であり、繩張争ひであると見られ、アジアの戦争は、弱き支那に對する日本の侵略政策の現はれであると評されて來た。そしてまた、實際にも、それまでは同盟條約に掲げられた「世界新秩序」といふが如き雄大なる構想は、三國共に敢て口にせず、ただ、それぞれ目前の分野に於て舊秩序を一掃することを以て主眼としたのであつた。然るに、この條約を以て、日本が「日滿支」ブロックを超えて「大東亞」共榮圈建設の意圖を内外に表明すると共に、獨伊も、ヨーロッパ、アフリカを包含する廣大なる地域に互つて新秩序を建設するの決意を明かにし、しかし

て、この東西の新秩序の間に密接なる協力関係を設定すべしといふに至つて、ここに、今日の世界動亂は、その性格と歸趨とが判然として來た。

もともと世界史に依つて、同一の使命を割當てられた三國ではあるが、かうしてその提携合作が儼然たる條約となるに及んで、之と對立する勢力も、一層その結束を固めるのは自然であつて、條約發表以來アメリカの態度が著しく硬化し、そのイギリス援助熱がひとときは昂まつたのは事實である。從來も、日本及び獨伊に對し、露はなる敵意を表し、我々の行動をこと毎に阻害して來たのであるが、最近の情勢では、アメリカは早晩東西の戦争に介入して、有史以來の大戦亂時代を導入するのではないかとの懸念が、日と共に深まりつつある。

これは蓋し、不可避なる趨勢である。今日世界を兩分する新舊の勢力は、その政治、經濟、文化の一切に互り性格と理念とを異にするのであつて、アメリカこそは、その舊き勢力を最も顯著に有力に代表するものであり、ヨーロッパの舊秩序の敗退は、アメリカのさうした地位を益々表面に浮き上らせるのであるから、日獨伊が世

界の新秩序を目標として協力合作するの事實に當面しては、自らが攻撃の目標に選ばれたるが如く感ずるのは自然である。アメリカがい、今直ちに參戦せぬのは、その再軍備の未完成とか、輿論の不一致とか、戦局がまだ之を必要とせぬ爲めとか、色と理由はあるであらうが、事實に於て、アメリカがイギリスと一體となり、ともに戦つてゐるものであることは間違ひなく、アメリカを除いた戦争の終局を考へることは不可能である。

2 アメリカの參戦は必至

アメリカが、その絶大なる人的・物的資源を投げ込むとすれば、戦争は必然的に頗る長期に亙るものと覺悟しなければならぬ。併し乍ら之に依つて、人類文化の没落を見るとなすが如きは、抑々今次戦争の意義を解せざるもの言である。今日の動亂は何に依つて惹き起されたか。自由主義文明の行詰りこそ、その原因ではないか。舊き殻を破つて、新しきものが生れ出でんとするのが、今日の戦争ではない

か。東西の新秩序とは、このことを外にしては、意義がない筈だ。生命と物との破壊は、已むを得ない。それは、併し文明の破壊でも、文化の没落でもない。燦然たる新しき文化が生れる爲めの犠牲に過ぎない。人類の思想が、一大轉換を遂げるためには、常にさうした長期の破壊時代を経過したのである。アメリカが、この戦争に何等かの形に於て巻き込まれることは當然であるのみならず、實は、必要なのであるまいか、世界の爲めにも、アメリカ自身の爲めにも。何となれば、それに依つてのみ、歴史の轉換は可能であり、世界は更生し得るからである。

日獨伊同盟は、アメリカの參戰を阻止する爲めに結ばれたと云はれる。政治家の意思は、正にその通りであつたらう。アメリカが惠まれたるその環境に満足し、舊世界の問題に一切容喙せず、アジアとヨーロッパの新秩序を成るがままに任せるならば、目前人類の惨苦は、輕減され、所謂平和の恢復は、比較的容易であらう。しかしそれは出来ないことである。新秩序運動を必要ならしめた原因を最も多分に包藏するアメリカが、いつまでも埒外に留まるといふことはあり得ないのである。實

際に於ては、アメリカの中立を確保せんとした條約は、却つてその參戰を不可避ならしめたとも云へる。何となれば、ヨーロッパの新秩序とアジアの新秩序とは、この條約に依つて不可分の關係に置かれ、而して、東半球が新體制一色に塗り潰されるならば、西半球が獨り依然たる舊體制を維持することは困難であり、而もアメリカの國內秩序の支配者等は、乾坤一擲の大戦争を賭するに非ずんば決してその舊套を脱ぎ棄てることを肯んずるものではないからである。

3 獨伊とイギリスの地位

ヨーロッパに於ける武力戰に關する限り、今後も破壊は熾烈であり、犠牲は甚大であつても、期間はさまで長くないであらうし、結果の豫想も敢て困難ではないやうだ。大陸からイギリス勢力の一掃を見るのは時の問題であり、獨伊は、スカンデナヴィアから、バルカン、近東、アフリカに互る廣大なる領域を手中に收め、着々復興を計り、優に自給自足を營み得るから、時日の経過は却つてその地位を安固な

らしめる。これに反して、大陸に近接して、しかも一物もこれに仰ぐことを得ず、徒らに地の利を得たる敵の空爆と潜水攻撃に曝されるイギリスの地位は、日とともにその困難を増すであらうから、獨伊としては、上陸作戦の危険と犠牲を敢てする必要はないかとも思はれる。

フランスの敗れたる日、既にこのことは明瞭となつたのであるが、之を知りつつ、イギリスは獨逸の和平提議を斥けた。全アングロ・サクソン世界の力を擧げて、獨伊との死闘を決意したからである。ヒットラー總統としても、ここに新たな決心と準備とをしなければならなくなつた。勝に乗じて、英本土の攻略を試みなかつたのは、その爲めではあるまいか。全英帝國と、次でアメリカ合衆國との長期決戦となれば、ドイツとしては、爲さねばならぬことは甚だ多い。先づ第一に、ヨーロッパ大陸を固めなければならぬ。そして、アジアとの聯繫も必要である。當初から、短期戦と共に長期戦に對しても用意を怠らなかつたと云はれるドイツではあるが、今日は眞劍に持久戦を覺悟し、その準備をなしつつあるやうに思はれる。バルカン

工作、地中海作戦に乗り出したのは、その爲めであらう。先づ、盟邦イタリアの立場を容易にし、相共に長期抗争の姿勢を整へなければならぬ。従つて、必ずしも英本土の攻略を急がぬやうにも思はれる。勿論、春と共に大規模の攻撃は開始するであらうが、本土が落ちてでも戦争は終局とならないことは、今日では獨伊共に豫見してゐることであらう。

アメリカとの戦争が不可避であるならば、海軍力の劣る獨伊としては、之をヨーロッパに引寄せて戦ふのが勝手がよいとも云へぬであらうか。地中海からイギリスを驅逐すれば、もはや彼等は多く敵から損傷を受ける心配はない。かうなると、イギリスの惱みは、四千八百萬の國民の住む本土が餘りに大陸に近過ぎることだ。住民さへなくば、あの島は戦略的に抛棄することも出来るであらうが、いやでも、最後までこれを死守しなければならぬのは、イギリスの最も苦痛とする所であらう。

4 世界の四大ブロック

七二

今日までの経過に徴しても、今後の見透しから云つても、イギリスが遂にヨーロッパから敗退することは、結局免れない運命と思はれるが、アメリカがその前後に於て正式に参戦することも必然の勢と見られるから、戦争が將來如何なる徑路を辿るかは、豫測の限りではない。ただアメリカの参戦は、當然日米戦争となるのであるから、戦禍がアジアに波及することは勿論である。英本土没落と共に、和平の可能性が絶無とは云はぬが、我々としては、最悪に備へなければならぬ。アメリカの再軍備は、未だ完成に時日を要するし、直ちに火花を散らしての武力戦となるや否やは別問題であるが、何れの途、非常なる長期戦の覚悟は必要である。

前途に就て、徒らなる樂觀は戒めなければならぬが、抑々今日の戦争は、世界舊秩序の行詰りから起つたのであるから、絶大なる犠牲と慘禍とが、再び水泡に歸して、依然たる舊世界で留まるといふことは、人類社會の進歩と向上とに信仰を有

するものの想像し得ない所である。然らば、歴史の必然とも云ふべき舊秩序の没落、新秩序の建設は、終局的には如何なる形をもつて實現せられるであらうか。

一般には、今後の世界が、四つのブロックに分たれるであらうといはれる。即ち、日本、獨・伊、ソ聯、及びアメリカを中心とする夫々の廣地域經濟に分れ、原則的に各ブロック内に於て自給自足の生活を營み、貿易は無相通ずる物々交換であり、各々ブロックの文化水準を高めることを以てその目的とし、個人の致富を唯一最高の動機とせず、之によつて従來の如き國際間の摩擦が除かれ、平和が維持されるであらうといふのである。

5 舊秩序の最後の牙城

このうち、ソヴェート・ブロックは現在のままでは北に偏して完全ではない。さらに南方に向つて、その圏域を擴大する必要があると思はれるが、斯くの如き世界の新秩序に對して、最後まで反對せんとするのは、アメリカ及び今後ここに落ちの

びて来る所の全世界の舊秩序分子であらう。これは、誠に皮肉なことで、四大プロツクのうち、最も自然に恵まれ物資の不足なきアメリカ・ブロツクが、新秩序に對して最も不満を抱くといふことになるが、それは一に彼等の世界觀が然らしむるのであつて、ユダヤ及びアングロ・サクソンの金融資本的搾取經濟の夢を忘れ得ないことに歸するのである。彼等としては、金の力を以て、全世界に號令して來た過去多年の榮華を一朝にして失ふことは、到底忍び得ないわけであつて、さればこそ、ヨーロッパを追はれても、なほアジアに據つて他民族の搾取掠奪を續けんともがくであらうし、その爲めには、人類を驅つて、十年二十年に亘る大混亂の渦中に投ずるを辭せずと云ふのである。さりながら、少數の者の斯くの如き横暴は、天人共に許さぬところであり、第一アメリカの民衆が長くこれに甘んぜぬであらう。アメリカの如き社會は繁榮が續く限り無事であるが、一度非常時の波に洗はれると、その基礎は甚だ脆弱であることは、先年の大恐慌の際に於けるアメリカ民心の深刻なる動搖を目撃したものには何等疑ふ餘地はないのである。目前、世界の金塊を大部分

その手に收め、無盡藏の資源と厩大なる工業力を誇り、いやが上にも軍備を増強して、この物資力を以てすれば、狂瀾を既倒に廻し、世界の革新勢力を一手に堰き止め得ると自負するであらうが、我々は、時勢に逆行し、天理人道に反したる、斯くの如き行き方が罰を受けずに濟むとは考へない。アメリカはさうした無理な盲目的な努力を續けることによつて、必ず内に破綻百出し、遂には一大社會革命に終らざるを得ぬであらう。

即ち、舊秩序の最後の牙城アメリカそのものに、内部から新秩序が盛り上ることによつて、ここに初めて歴史の大轉換が完成されるであらうことを、われわれは敢て豫言せんとするものである。(皇紀二千六百一年「イタリヤ」誌四月創刊號掲載)

第三章 明日の世界へ發足す

1 世界史の劃期的轉換

九月二十七日、ベルリンにおいて調印せられた日獨伊三國同盟は、人類の將來に取つての重要性において、世界史上かつてその比を見ざる劃期的のものであるといはねばならぬ。三國は條約前文に明記する如くこれによつて諸國民、諸民族をして各々その所を得しめて、共存共榮の實を擧げ、地上に恆久平和を實現せんことを期するものである。

そもそも平和は人類本然の欲求であり、過去においても繰返し平和建設の試みはなされたのであつて、古來の大宗教はいづれも人類社會に平和安穩を招來することをもつてその眼目とした。しかしながら神のものと帝王のものとを區別し、肉體と

精神、物と心を引離す出世間的方法をもつてしては、遂に生くる人間の社會を救ふことは出来ぬことがわかつた。他方神を無視し、正義を拒否し、人類同胞愛を伴はざる物質萬能、弱肉強食の實力政治の行き方も、人間社會に混亂と鬭争と不幸以外の何物をも齎さぬことが目前の事實として立證されてゐる。日獨伊の三國は、過去におけるこれらの失敗に顧みて、かつて試みられざる新しき方法をもつて、この人類最大の問題を解決せんとするのであつて、これこそ三國條約のもつ基本的の意義である。

三國條約にいふところの世界新秩序とはかくの如き動機に胚胎するものであるが、ヨーロッパにおいてもアジアにおいても、目前血なまぐさき鬭争が進行中であり、直接間接これに携はり、またその影響の下に立たされる多くの民族が敵愾心と憎惡とに燃え、或ひは不當に侵犯されたりと感じ、各自の將來についても絶大の不安を抱くものある現下の情勢においては、條約當事國の企圖するところを素直に認識し理解せんことを求むるは無理である。殊に現在進行中の世界史の一大轉換は、多く

の國民に對し過去數千年にわたつて慣され來りたる世界觀、人生觀を一擲せんことを要請するものであるがゆゑに、世界新秩序の眞の意義が一般に受け容れられるまでには幾多の年月を要することであらう。しかもその年月は平穩なる年月ではあり得ない。關係三國に取つては、忍苦と努力の永き期間が前途に横はるのであつて、條約は明かにこれを豫見し、これに備ふるの約束を取結んでゐるのである。

さればとて、三國がいたづらに鬭争を歓迎するものでないことはもちろんである。日本は支那事變の過去三年を通じ、常に支那に向つてその反省を求め、日本の眞意と新しき時代の意義とを認識せんことを勸説して來たのであり、ヨーロッパにおいても戦前から、獨伊の指導者らは英佛等に對して同様平和的了解を提議し續けたのである。不幸にして、東西における新舊思想の對立背馳はあまりにも深刻であつて、本質的に融和は不可能であるがゆゑに死鬭が續けられて來たのであるが、戦争の關する限り、アジアにおいてもヨーロッパにおいても勝敗の決はすでに分明であり、敗者の最後の屈服が一日早ければ一日だけ、人類の慘苦は輕減されるわけである。

もつとも東西における今次戦争の性格は従來の戦争と根本において相違してゐるのであつて、絶大の破壊を伴ひながら目的は建設であるがゆゑに、東西とも戦塵のうちから徐々に新しき秩序が生れつつある。破壊の裏に建設が行はれてゐる。戦勝三國は一方に大なる消費をしながら、地方、物的にも精神的にもその活力は日ともにも増大しつつある。これが創造する者の強味であるが、いたづらに従來の觀念に捉はれて、すべてを物質と計數とのみから割り出さんとする人々に取つては、まことにお伽噺とも思はれるであらう。であるがゆゑに、この現實に直面しながら世上いまだ目醒めぬものが頗る多い。因襲の力が如何に抜き難いかを語るものである。彼れらは日獨伊三國の發揮しつつある實力の根源がどこに存するかを悟らない。皮相なる事實にのみ着眼し、三國が代表する新しき原理は單なる物質力のみをもつてしては到底打ち勝ち難きものであることを知らない。かくして三國の敵は一切を擧げて舊秩序一日の生命を延ばさんとして、頑迷なる抵抗を續けてゐる。歴史の過程において當然没落を約束づけられたるものを強ひて護らんとする努力であつて、世

紀の悲劇といはねばならぬ。斯くの如く認識と叡智とを缺く者が世界の廣き地域にわたつていまだに多數存在するがゆゑにこそ、日獨伊の三國が今回の條約を締結するの必要を感じたのである。これが條約の消極面であり、専ら戦禍の不擴大、破壊期間の短縮を企圖する部面である。現實の問題としては、これあるがために三國條約は偉大なる威力を發揮するものであり、禍心ある向に對しては尠からず脅威を及ぼすであらうが、三國同盟の眞の目的は飽くまでもその積極面に存する。すなはち世界新秩序の建設に貢獻することこそ、日獨伊三國が本條約によつて達成せんとする主目的である。自分が冒頭三國同盟の世界史的重要性を強調したのは、専らこの積極面における條約の作用を考慮に入れてのことである。

2 明日の世界

しからば日獨伊三國が取りあへず各自の分野において、しかして終局的には地球の全面にわたつて實現せんとする新秩序は如何なるものか。現在の段階においてこ

の質問に明確なる回答を與へることは困難であるが、三國が均しく個人主義、デモクラシーの思想を揚棄し、全體主義的世界觀をもつて人類の社會を律すべき根本原理となせる以上、彼れらの指導によつて造り出されんとする新秩序の性格はほほ明瞭であるべき筈だ。

思ふに遠くギリシャの昔より最近代に至るまでの西洋の文明は、形式においては種々の變遷を経たが、その基調をなすものは一貫して個人主義的宇宙觀であつた。プロシヤの勃興とともに、ドイツ民族によつていろいろの分野にわたつて試みられたクルツール運動は、この西洋文明に對してはじめて反旗を翻したるものであるが、當時のドイツはいまだその國家及び社會の機構においても、一般の國民思想においても自由主義、個人主義を脱却し得なかつたため、第一次ヨーロッパ戰爭においてはつひに敗北を招き、ドイツ・クルツールの語はいたづらに敵側嘲笑の的となつた。しかしながら、この一時挫折したるクルツール・カムフが、人類史上必然の動向を指示するものであつたことは、その後の進展によつて證明されつつある。イタリア

のファッショ革命によつて烽火が上げられ、ドイツのナチス革命において最高潮に達せんとする全體主義運動は今や燎原の火の如く擴がり、明日の世界がこの新しき宇宙觀をもつて一色に塗り潰さるべきことは殆んど疑ふの餘地なきに至つた。

元來全體主義の運動は、西洋においては數千年の古に遡り、古代ゲルマン、古代ラテンの純朴にして雄健なる人間本能への復歸を意味するものと自分は解するのであるが、日本においてもドイツ、イタリアの革命運動と時を同じうして同様の復古運動が起つた。ただここでは獨伊におけるが如くレボルシヨンの名に價する程の抜本的變革を必要としない。なんとすれば日本においては肇國以來、國體は萬古不易の基礎の上に打樹てられてをり、君民一體の醇乎として醇なる全體主義は日本民族不拔の信仰となつてゐるからである。その日本においても、しかしながら、過去半世紀にわたつて自由主義文明の害惡は古來の傳統を蝕ばみ、内政においても外交においても積弊堪へ難きものあるに至つて遂に一九三一年の滿洲事變となり、ここに健全なる民族本能は爆發して、外は英米佛等民主主義の諸國が人類に強制し來れ

る不當なる現状に對して挑戦し、内に在つては一切の外來思想を再検討して、日本的なるものへの復歸が強く叫ばれるに至つた。日本のこの革新運動は支那事變に及んでいよいよその旗幟を鮮明にし、標語としても古典的なる「八紘一字」の表現が用ゐられ、東亞新秩序の建設が事變の最終目的として全國民の固き信念となつたのである。かくの如く過去十年にわたる極東の紛亂は大和民族の復古運動と呼ぶことが出来るのであつて、その運動に對する主たる障礙は舊秩序に戀々たる民主諸國の策動である。従つてアジアの戰亂は本質においてはこれら民主主義諸國の代表する世界觀と、開關以來連綿として日本民族によつて護られ、培はれ來りたる皇道精神との衝突であるとする事が出来る。ヨーロッパにおける現前の戦争も根本においてはイデオロギーの相剋であり、文明（チビリサチオン）と文化（クルツール）との衝突であるがゆゑに、その意味において東西の戦争はその本質を同じうするといはれるのである。

東西の戦争をかくの如く觀じ、いはゆる新秩序運動とは畢竟するところ個人主義的世界觀を止揚して人間の本來性に還らんとする思想的、文化的の運動であるとするのでなければ、日獨伊三國の協力によつて成就せらるべき明日の世界秩序を正しく理解することは出来ない。

かくて新しき世界が現出せんがためにはまづ第一に大なる思想の飛躍が遂げられなければならぬ。數千年來人類を支配したる心の習慣が打破されなければならぬ。一切の事物は再評價を必要とし、神と人間の本質に關する再吟味が要請される。多くのドグマと偏見とは一掃されるであらう。個人の自由平等といひ、天賦の人權といひ、國家の絶對主權とか民族の自決權といふが如きものも、從來と異つた角度からこれを眺めなければならぬ。およそ過去において、この世をば生きる甲斐あらむるものとして高く評價せられて來たいろいろの物が、新しき世界においてはその價値を失ふであらう。けだし今日に至るまで世界の舊勢力が特に尊重し來つたところのものこそ、地上の不正義、不合理、暴虐、搾取、その他萬惡の根源をなすことが指摘されねばならぬからである。もちろんかうした世界史始まつて以來の大變革

が一朝一夕にして實現されようとは考へられない、しかしながら今日大勢は明かにそこに向つてゐるのみならず、アジア、ヨーロッパの廣汎なる地域にわたつて現に新しき秩序は着々樹立されつつあり、今後は加速度的なその前進が約束されてゐるのである。

日獨伊三國同盟の生れたる理由並びにその負はされたる使命はかくして頗る明瞭である。(一九四〇年「ベルリン・ローマ・東京」誌十一月號特別寄稿)

第四章 三國條約の世界史的意義

1 新秩序による世界平和の創建

過般の日獨伊三國條約は、多くの人に依つて從來歴史に有りふれたる軍事同盟と同様に看做されて居る。なるほど、三國は東西各々の分野に於て目下死力を竭して戦争に従事して居り、若し今後、第三國にして新しく各自の敵方に荷擔するものあるに於ては、相共に之に當ることを約したものであるから、その限りに於て同盟條約であることに間違ひはない。然らば何故に三國は一步を進めて、當初から率直に目前の戦争を共同に戦ふの條約を結ばなかつたのであらうか。獨伊の直面する問題と日本の解決せんとする問題はその本質を同じうし、或る意味に於ては共同の敵性勢力と闘ひつつあるのではないか。然るに「第三國の攻撃を受けたる場合」にのみ

日獨伊が共同戦線を張ると云ふ條件附の條約としたのは何故であらうか。若し單に戦争に勝利を得ることのみを眼目とするならば、三國は即時無條件の同盟關係に入るのが最も簡明であり、目的に合致するわけではないか。然るにそれを爲さなかつた所を見れば、三國條約に於ては軍事は寧ろ第二義であつて、東西に於ける新秩序の建設に協力し世界平和に貢献するを以てその主眼とするものであると云はなければならぬ。勿論三國が戦争に勝ち抜くのでなければ新秩序は思ひも依らぬのであるから、單に第三國の攻撃の場合のみならず、今後東西の戦局如何によつては、條約の規定に拘らず、三國は斷然、軍事的に協力することも充分に想像し得る所であつて、條約の締結が當時全世界に異常なる波紋を投げたのはその爲めである。ただ今日迄の経過に照し、戦争の歸結は略々確定的であつて、今後第三國の加入等、國際政局に意外の變化を見ざる限り、この儘ヨーロッパに於ては獨伊、東洋に於ては日本を指導國家として新しき秩序の建設を見ることは疑ないのであるから、この情勢を前にして、各自の勝利を確信する三國の間に結ばれたる條約が、あの形式を取

つたことは寧ろ自然であると云へる。

さうであるから、三國條約は單に同盟條約と呼ぶよりは新秩序條約と稱する方が適當である。三國が一時戦争の目的の爲め相結んだと云ふ丈けではなく、寧ろ將來永きに互り同志國家として世界の再建に協力を約した所に、更に重大なる意義があるのである。例へばヨーロッパに於て獨伊の敵が降服しアジアに於て日支の全面的和平が出来たとすれば、條約の第三條に規定する相互援助の義務は自然消滅するとも見られるであらうが、東西の新秩序については十年間獨伊と日本とは互に協力することを約したのであるから、若しその期間、外力による新しい障害が起つて新秩序を覆滅せんとするが如き場合には、條約は其の効力を發揮するものと解さなければならぬ。斯の如く解するとき、今回の條約は三國今後の運命に頗る大きな關係を有つものである。加之、東西の新秩序に包含さるべき領域は廣大であり、民族は甚だ數多いのであるから、この條約が今後の世界に於て果すべき役割は實に重大なるものと云はなければならぬ。

2 歴史の要請を實踐する適格者

而して三國の協力に依つて生れんとする新秩序が如何なる性格を有すべきかに就ては未だ的確なることは云へないのであるが、三國條約はその前文に於て、各國民、各民族をして各々その所を得しめ、共存共榮の實を擧げしめる、と云つて居る。之に由つて見ても、三國の志す新世界に於ては、從來のアングロ・サクソン流の帝國主義的侵略乃至ユダヤ國際資本的の擄取が排除さるべきことだけは斷言し得る。從來の世界に於ける二つの特徴は、第一には二三の大國が世界の廣き領域を獨占して他の利用を拒み、言ひ様もなき虐政の下に多數の人類を擄取して不義の富を積み實際間に不當の勢力を振るつて來たことであり、第二はこの地球上に無數の無力なる「主權」國なるものが存在し、國境を隔てて互に對峙し、交通を阻み、生産の重複を來し、大國の驅使する所となつて平和を攪亂するの原因をなして來たことである。新しき世界に於ては地上の不和と、人類生活の貧困を必然すべき斯の如き不合理不

正義は清算されなければならぬ。そして日獨伊、共にその國內體制に於て所謂全體主義的世界觀を遵奉し、自由主義、個人主義を一掃し資本の擄取を禁絶したことは、この三國をして斯の如き新秩序を建設するの聖業を擔當すべき適格者たらしむるものである。今日までこの三國は所謂デモクラシー諸國からあらゆる惡罵を浴せられて來た。日獨伊三國の名は侵略主義、軍國主義、帝國主義の代名詞であつた。實際に於ては、併し乍ら彼等の犯したる最大の罪とは、勤勉にして勇敢、新興の意氣に燃えて舉國一丸、貧しき資源を以て能くデモクラシー諸國に拮抗するの實力を蓄へ、意を決して人類社會に正義と平和とを齎さんが爲の大事業に乗り出したことに外ならない。何れがほんたうの惡人であるか、何れがよりよく神の意に副ひ、人類の福祉に貢獻するかは、遠からず事實に依つて證明されるであらう。日獨伊の三國が今回の條約によつて確く結ばれたのは、實に大きな世界史的意義を有つものである。(皇紀二千六百年十二月十八日、駐支イタリヤ大使館發行「マルコ・ポーロ」誌一九四一年一月號特別寄稿)

第五章 同志國家の血盟

1 相互信頼に基く世界新秩序條約

二十七日調印された日獨伊三國條約は、その意義極めて重大であるが、内容は簡單明瞭で多く説明を必要としない。條約には普通議定書が附屬するのであるが、今回はそれもない。條文にある通り條約實施に關する細目は今後組織される委員會によつて決定されることになつてゐる。條約の體裁も専門家の手になつたのでないから従來の型と大分かけ離れてゐる。條約類の専門家の目から見たら奇異に感ずる節が多いかも知れぬ。法律的にこまかく分析したらいろいろと議論もあるだらうが、今回の條約はその内容において歴史上に前例のないものであり、端的にいへば日獨伊の同志國家が血をすすつて提携を誓つたものであるから、言葉は簡單であり、素

朴であるのは當然である。お互の権利義務について法律的に豫め詳細な解釋を附けたり、心裡留保があつたりしては條約の價値を滅却する次第であつて、要は相互信頼の一語に盡きる。

それであるから條約そのものに關しては政府公表によつて全貌がつくされてをり、この上多くいふべきことはないのであり、將來これによつていかなる影響を捲起し、條約そのものがいかに運用され、またその性格がいかに發展するかなどの問題は、一に今後の進展に徴するのほかなく、以下自分が述べようとするところは全然一個人の意見乃至は觀測の域を出ないのであつて、何等三國間の取決めに關し特別の消息を洩らすものでもなければ、また日本政府の意向、方針などとは全く關係のないものであるといふ事を斷つておきたい。

本條約は正式の呼稱は「三國條約」といふことであるが、一般には三國同盟といはれてゐるやうである。

條約第三條の規定を見れば、立派に防守同盟といふことも出来るし、または保障條約乃至相互援助條約ともいへるであらう。要するにヨーロッパ及びアジアにおける戦争がこの上擴大することを防止することが眼目のやうに解せられる。國際政局今後の推移如何によつてはこの第三條が適用を見、従つてこの條項が條約の骨子となる場合も考へられるけれども、自分はむしろ本條約の特質を新秩序の建設といふことに求めたい。

後世歴史家はこれを世界新秩序條約と呼ぶやうになりはしないかと思ふ。自由主義時代の末期に不戰條約といふものが出來、當時は頗る型破りの新しい條約と考へられたのであるが、この新秩序條約も型破りの點においては彼に劣らぬものがある。不戰條約が條約専門家の感覺には頗るピンと來ないものを多分に含んでをつたやうに新秩序條約も頗る非専門的である。第一、新秩序は何を意味するかの説明がない。新秩序の建設さるべきヨーロッパ及び大東亞の地域に關しても何の規定もない。これらのことは今後逐次明瞭になつてくることと思ふが、今日までの経過においても常識的には三國の企圖する新秩序が何を意味するか、またおのおのの目指す地域の

範圍がいかなるものであるかといふことについて一通りのことはいへる。

2 世界新秩序の理念

いはゆる新秩序といふことは單に現状を打破するといふ消極面だけではなしに、新しき世界がいかにあるべきかといふ積極的の一つのプログラムを含んでゐるはずである。新秩序といふ言葉が世間に通用しだしたのは、第一次近衛内閣の東亞新秩序建設に關する聲明に始まるやうであるが、ヒットラーはじめドイツのナチ指導者達はそれよりも以前から好んでこの言葉を使つてゐる。

東亞新秩序はいかなる内容を持つべきかについては、自分の知る限りでは、未だ日本において責任ある説明はなされてゐないやうに思ふ。またドイツの唱へる新秩序といふものも、ヨーロッパ政局の變遷につれてだんだん變つて來てゐるやうに思はれる。

日獨伊三國がそれぞれ心に描く新秩序といふものも、さうであるから必ずしも明瞭にお互に判つてゐるとはいへない。しかしこの點をはつきりさせることは頗る重要なことではないかと思ふ。もちろん條約としてはお互に勢力範圍を認めあひ、其の範圍においてはフリーハンドを承認するといふことでも充分意味はなすのであるが、それでは甚だ舊時代の臭ひがする。自分は今日の世界の對立を單なる強國間の爭覇戰乃至繩張爭ひとして見たくはない。英米佛などの舊勢力に對して日獨伊或はソ聯などの新興國の勢力争ひといふことでは意味がない。

またアングロ・サクソン對チュートンとか、黄色人種對白色人種などといふ人種的の葛藤として見るのも單純過ぎる。要するにこれは從來言ひ古されて來たことではあるが、一つの文化戰、思想戰として見なければならぬのではないかと思はれる。一口にいへばデモクラシイ對全體主義の争ひであるが、思想の對立、文化の對立として見る時に、これは人類歴史の上で前古未曾有の大變革を意味するものである。

過去數千年の文化史上、人類の思想は幾度か變遷を見たのであるが、ギリシヤ以來最近までの西洋の世界觀は根本に於てはいづれも個人主義に立脚するものであつ

て、全體主義的世界觀はその間、長く眠つてをった。ドイツ、イタリアに起つた全體主義運動は、さうであるからしてギリシヤ以前に遡るものであり、日本に於て開闢以來完全に維持せられ培はれて来たところの人類初期の健全にして根源的なる思想への復歸といふことが出来る。獨伊の全體主義の多分に日本的のものを含むのはそのためである。日本が支那事變を通じて東亞新秩序の建設を唱へるに當つて、肇國の精神、八紘一字の理想を強調しつつあるのは、この意味において獨伊の新秩序運動と揆を一にするものがある。

ヨーロッパにおいてはギリシヤ以前に遡り、日本においては神代に遡る。すなはち人間の本來性に立ちかへるところの運動が東西の新秩序運動であるといふことがいへる。さうであるが故に、英米方面において日本を獨伊と同一範疇に入れて一樣に全體主義國と呼ぶのは必ずしも間違つてをらぬわけであり、三國の合作提携はさうした根源的な、思想的な觀點から見ても頗る自然なのであるが、さて現實的の問題に立ち還つて、獨伊がヨーロッパに於て具體的にいかなる新文化を作らんとする

か、日本が大東亞の地域において何をなさんとするか、更に三國各々の國內體制、その政治經濟についても類型的の行き方をとるであらうかどうかといふことは、一般から見ても日本にとつても目前の大問題である。

3 日本新秩序の原則

日本において昨今新體制の運動が盛り上つて來てゐるが、肇國の精神に還り、國體の本義を明徴にし、萬民翼賛の體制を整へるといふことは今日何人も異論のないところであるが、その國體の本義を顯現する方法として政治經濟の實際の機構運営をいかにすべきかといふことは餘り多く論ぜられてゐないやうに思ふ。獨伊がヨーロッパにおいて作らんとする新秩序は獨伊自身及び他のヨーロッパ諸國の政治經濟の體制をいかにするかといふことが實際問題として最も重要なのであつて、それについて今日獨伊においてはかなり明瞭なプランがすでに出來てゐるやうに思はれるのであるが、日本は大アジアの地域において果していかなる新秩序を作らんとす

るのであるか、その大アジア新秩序の中核となるべき日本の新體制をいかにすべきか、といふことについてまづ明確なる構圖を持たなければならぬ。

今日、日本國內に於て未だ多分にその殘滓を留めるところの舊秩序的 세계觀並に機構をそのままにして、果して大東亞の新秩序が出来るかどうか。また假りにそれが可能であつたとしても、さういふ大東亞秩序をもつて獨伊のヨーロッパ新秩序と果して提携して行けるかどうか。自分は外交の轉換と國內新體制とが同一物の兩面であるといふことを主張して來てゐる。すなはち現在のままの姿では日本は獨伊との提携は不可能であると見るのであるが、この點は大方の深甚なる考究を願ひたいのである。

自分の見るところをもつてすれば世界の一大轉換を餘儀なくせしめたる動因は自由主義經濟の行詰りであると思ふ。敢てマルクス流の唯物史觀を遵奉するものではないが人類社會の變革は多くの場合、物質生活の行詰りがその原因となつてゐると思ふ。アングロ・サクソン流の資本主義的搾取經濟が横行する限り、さうして少數

の個人的手中に無限の富の蓄積を許す限り、この地球はこれを五倍にしても十倍にしてもまだ小さ過ぎるのである。

早い話が四五千萬の民族が世界の四分の一の領土と人民を領有し、さうして少數金權者の利益のために或はこれを搾取し、或は地下無限の資源を伏せて他の利用を阻んでゐるといふことでは人類の物質生活が今日の貧困を來すのもやむを得ないわけである。ヨーロッパの地域において大東亞の領域においてこの不合理を矯正するといふことは、三國條約の謳つてゐる新秩序建設の主なる内容をなすものであらうが、果して然らば新秩序條約が關係三國に要求するところは、第一にはその全體主義世界觀を堅持することであり、第二にはそれに基いて弱肉強食の搾取體制を放棄することではなければならぬ。英米佛などの横暴を憎み、これを打倒したとしても、彼等に代つて三國が同じく彼等のなしたことをなさうといふのでは、これは從來の強國爭覇に墮するものであつて、何等人類文化に寄與するところはない。その行き方では世界の恒久平和は到底得られない。

4 フンク聲明の意義

1011

過般、獨の經濟相フンク氏は新しいヨーロッパにてはナチ ドイツに於けるが如く今後金貨を使用しないであらうといふことを述べてゐる。これは單に新ヨーロッパの財政經濟の問題としてではなく、新秩序そのものの性格を示すものとして甚だ重大なる意義を有するものと考へる。從來の世界において弱者搾取の具として金がいかに重要な役割を演じたかに想到すれば、フンク聲明の重要性はいかにこれを強調しても、し過ぎることはない。

獨伊の企圖する新秩序が果してかくの如き性格を有するものとしたならば、舊秩序諸國特にその支配階級の立場から見ても、全體主義がいかに怖しい敵であるかは一見明瞭である。さうして日本は三國條約を締結することによつて、今正にこの兩者のいづれを選ぶべきかの岐路に立たされたわけである。

滿洲事變以來日本の採つて來た方針に鑑み、はたまた東亞新秩序建設の大理想を

掲げ來りたる手前、實際においては日本として何等その去就にまどふべきはずはないのであるが、國民の一部には問題をかくの如き形において考察することを肯じない者があるやうだ。新秩序條約締結に當つて日本朝野においても世界問題に對する感覺を新にする必要がありはせぬかと思ふ。

(皇紀二千六百年「東京朝日新聞」九月二十九日號掲載談話)

第六章 日獨伊世界再建の原理

一 新秩序要請の理念

1 全體主義——三國共通の根本思想

日獨伊三國同盟は當然出来るべきものが出来たのであるが、この同盟は従來の大國間の合從連衡、霸權争ひの爲めの同盟とは餘程性質がちがつて居る。勿論、日獨伊といふ新興諸國と英米佛といふやうな舊い、物を持つた、現状を維持しようとする諸國との間には利害も衝突してゐるのであるから、三國がお互に結び合ふといふことは自然であつて、その點ではやはり利害を持つて集つた所の同盟といふことは

言へるのであるけれども、併し乍ら今日の世界に於ては從來のさういふ各國間の離合集散とは餘程ちがつた意味に於ての新しい國家提携が必然となつて來たのである。つまり根本の思想——難かしい言葉でいへば世界觀を同じうする國が互に結んだといふ點にこの同盟の特色がある。

日本では支那事變以來、事變解決といふことが最も重大な問題であつて多くの人は事變解決の必要から割出してこの條約ができたと見てゐる様である。併し乍らこの同盟のできた結果は支那事變の解決も樂にはなるが、根本に於ては新しい世界と舊い世界との入れ替りと言ふか、世界の轉換——それを表徴するものが今回の同盟である。そして世界の轉換といふことは同時に各國それぞれの國內體制の轉換といふことと密接なる關聯がある。さういふ關係があればこそ日獨伊同盟について日本國內で中々意見が一致しなかつたのである。一方に之を強く主張するものがあるれば他方では之を極力排撃して來た關係は、さういふ國內機構の問題と密接な關聯があると私は見る。さればこそ、この同盟が愈々出來た時に畏れ多くも御詔勅が下さ

れた。日本に於ては國家の大きな政策が決定される場合には常に御詔勅が下されるのである。日獨伊同盟といふものも之に依つて日本國內の體制及び日本國家の向ふべき進路が劃期的な大轉換を遂ぐべき非常に大きな意味を持つものであるが故に、特に大詔が渙發せられたものと拜察する。他方からみればそれ程に國內の輿論を一致せしめることが困難だつたのである。この國內に於ける困難といふのは何處にあつたかと言へば、從來の日本は所謂自由主義的、資本主義的、民主主義的の諸國と提携をして來たのであつて、ドイツ流の或はイタリア流の全體主義的の行き方といふものには日本の有力なる階層は反對せざるを得なかつた。日獨伊同盟を結べば外交の關係に於てはそれで宜しいとしても、國內の問題が直ちにその影響を受けて甚だ面白くない結果になると言ふ考へ方が漠然とではあるけれども有力に働いて來たことは否めない。

抑も過去三世紀の間に爛熟して來た所の自由主義文明、これが今日何れの國に於ても行詰つて居るといふことには問題はないのである。之を如何にして是正するか、

資本主義が無制限に發展して來た今日、世界を如何にして正道に引戻すかといふことに就ては、これまで色々の方策が樹てられて來たが、第一に何れの國に於ても試みられたのは、從來の人生觀、從來の世界觀と同一平面に於てこの積弊を打破しようといふことであつた。この從來の世界觀と言ふのは、日本の建國の精神、日本の國體の本義とは絶対に相容れないものであるが、その點に就て今日までの日本人の考へ方が無頓着であつて、英米流の自由主義を不思議ともせず、國家といふものは個人の機械的集合體であるといふ見方——政府は個人の活動を助長する爲めに存するものであり、個人を保護する爲めのものである、即ち個人の利益を伸張する爲めに在るのであるから、隨つて政府の個人に對する干涉は出来る限りその程度を制限しなければならぬ、といふのがイギリスあたりに起つた所の自由主義世界觀の根本の原理であるが、日本に於ても深く物ごとを考へず漠然と之を遵奉して來たのである。その行き方からすれば、要するに個人が全體よりも大事であるからして政治の要諦は最大多數の最大幸福を圖るといふことになる。最大多數の最大幸福といふ觀

點からすれば、資本主義が今日の如く進んで來ると、その原則には非常に背馳したものになり、却つて少數の者の最大幸福が圖られるといふ結果になつて居るのが今日の大多數の國に於ける實情である。これではいかぬ、どうしても個人が主體であり、個人が本であり、その個人の最大多數の者に幸福を持つて來る政治でなければならぬ。而して一國或は一社會に於て最大多數を占むるものは持たざる者である。そこでこれ等の積弊を打破し、持たざる者が結束して持たざる者に都合の好い政治をやらうといふのが社會主義或は共產主義の根本理念である。

つまり自由主義的世界觀で行くならば、この社會主義的、共產主義的の行き方といふものはどうしてもこれは認めなければならぬ。それが最近に於ける世界各國の趨勢だつたと思ふ。何處の國にも社會主義的共產主義的の運動が起つて來た。ロシアに於ては共產革命が成功した。その影響は一時可なり廣く各國に及び、日本あたりも大いにその影響を受けた。然るに國家或は社會を個人の機械的集りであると觀る世界觀が根本的に間違つて居ることは問題ないのであり、人間はもともと個々

ばらばらに地上に生れて来たものにあらずして初めから一つの集團として在り全體として在る。その全體の内に個人が完成し、全體として發展を遂げて来たのが人類の歴史である。この根本の事實に反したる所の個人主義的の人生觀に依つて國家社會を律して行くならばその弊害は必ず今日のやうになることは當然である。之を抜本塞源的に改革する爲には世界觀そのものが變つて來なければならぬ。さういふ新しい運動がドイツに起つたナチズムであり、イタリアのファッシズムである。

日本に於ても滿洲事變前後から、一方に於ては資本主義の弊害を認め、他方に於ては赤化思想が漸くその鋒芒を現して来たのに刺戟されて國體明徴運動が起つた。即ち日本の國體の本義に還つて政治經濟を建直すべしといふ運動が之である。日本の國體の本義はこれを一言にして言へば矢張り全體主義である。勿論獨伊の全體主義に比べて、こちらは三千年の歴史を有する醇平たる全體主義である。併し乍ら強ひて之を客觀的に或は科學的に分類すれば、英米の個人主義に對して、之を全體主義世界觀の範疇に加へることは差支ないと思ふ。つまりヨーロッパに於ては獨伊、

東洋に於ては日本に時を同じうして全體主義運動が起つて来た。

2 復古運動——史上未見の大變革

日本の全體主義運動は勿論前に述べた通りこれは國體明徴運動であつて、肇國の昔に遡る復古運動である。日本の歴史は古來常に復古に依つて革新が遂げられて居る。然るにドイツやイタリアの運動も實はやはり一種の復古運動なのである。

イタリアの運動は古ローマに復歸すると言つて居るが、古ローマは個人主義の中に育つた共和國であつて、ムッソリーニあたりの言ふファッシズムの根本精神はラチン民族の古代の純粹なる人生觀への遡及を意味するのである。ドイツに於てもナチ運動といふものはヒットラーの頭の中から生れて来たものではない。既にこの前の世界戦争前からドイツに於ては所謂新文化運動といふものが各分野に於て行はれて居たのである。その當時はドイツ國民一般が未だ自由主義的な考へ方に禍されて居つた爲めに遂に戦争に敗けて、ドイツの新文化運動と言ふものは一頓挫を來した。

その文化運動の根本は言はば太古のゲルマン民族の全體主義的世界觀にかへるといふ所にその本質があるのであるが、戦争に負けてドイツ民族が非常なる苦境に投入られた爲めに却つてこの復古運動が大いなる刺激を受け、ヒットラーといふ偉大なる指導者を生むに及んで遂に今日の成果を挙げ得たのである。であるからして日本の運動が復古運動であり、獨伊のそれも亦復古運動である。要するに過去の世界が數千年間個人主義に支配せられて居つたその以前に遡るのであるから、これは實に歴史始まつて以來の大變革を意味するのであつて、單に二、三百年の昔にかへるといふことではないのである。さういふ意味に於て、日獨伊が今日相提携して新しい世界を作らうといふこの運動は人類の歴史に嘗て無い大きな問題であると觀なければならぬ。

3 自由主義と全體主義

以上述べ來つた所によつて、日獨伊同盟が謳つて居る所の世界新秩序といふもの

が如何なる理念に基くかといふことが略々明瞭になつたと思ふが、今少しく詳しく述べれば、條約の前半に、萬邦をして各々その所を得しむるのが世界の恒久平和を來す先決條件であると言つて居り、而して日本も獨伊も各々その分野に於て各民族をして共存共榮の實を擧げしむるといふことを言つて居る。これはその表現の方法までも完全に日本の肇國の理想に基いて居るのであつて、實はこの文言は日本側で作つた、即ち我々の手に成つたものをそのまま一言も直さずに獨伊側が受容れて居る。併し乍ら彼等がこの精神そのままを日本のものとして受容れたかと言ふと、必ずしも彼等は日本のものであるといふ積りはないかも知れぬ。實は彼等自身の理想もやはりそこにあるのではないかと思はれる。

英米側はムツソリーニヤヒットラーを非常なる亂暴者であり、切取強盜をやる者のやうに攻撃して居るのであるが、實は今日のドイツ、イタリアの理想といふものは、英米の利己主義的な個人主義的なものと較べて遙かに高邁なるものであつて、日本の肇國の精神をそのまま表現した條約の前文を彼等が何等躊躇することなく、

一言半句も改めずに之を受容れて嚴肅なる條約を結んだといふ事實を見ても、獨伊が我々の同志として充分信頼し得るものであることが分る。従つてこの三國の協力に依つて出來上るべき世界の新秩序が必ず今日の世界よりも立派なものであらうことも疑ひないのである。

日本では今日英米追隨はいかぬと言ふ。これは最早や日本國民大多數の意見であつて之に反對する者は極めて少い。併し乍ら獨伊のやり方、あれも聊か困るといふものが随分ある。英米追隨がいかぬと同じやうに、獨伊追隨もいかぬ、特にドイツの眞似をしてはいかぬといふことを言ふ者が甚だ多い。これを言ふ者には二種類あると思ふ。一は所謂自由主義者であり、現状維持派である。彼等は主として獨裁主義を排撃する建前からこれを誹謗してゐるが經濟上の理由も勿論そこに存するのである。他の一は地下に潛んで來た所の共產主義的分子である。本來、共產主義といふものは前述の如く自由主義、個人主義の最後の段階を代表するものである。これと獨伊の全體主義とは丁度兩極端を代表して居るものであるが故に彼等から見ても

大の敵はやはり全體主義である。この全體主義といふものが現れる迄は彼等は資本主義がいかにと言つて來たのであるが、資本主義よりも更に本質的なる敵が現れると、この從來の自由主義は寧ろ我々の味方であるといふことで所謂人民戦線を作つてドイツ、イタリアを排撃した。今日、日本に於てもさうであるからして、現状維持を欲する人と左翼的のものがその間に明確な連絡があるかないかは知らぬが、おのづから一種の人民戦線プロックを形作つてゐる。これがドイツの全體主義、日本の皇道主義或は國體明徴を唱へる人達を排撃して居るのである。一概にファッシヨの名に於て總てのものを葬る現状を維持せんとする人達から見れば、ドイツ流の行き方であつても、ロシア流の行き方であつても、之を部分的に觀る時には共通のものもある。即ち資本主義の經濟を是正し、國家社會全體の福祉を強調するといふ點に於ては、ファッシヨは一脈ロシアの行き方に似た所もある。さうであるから現状を一日も永く持續せんとする向は、ナチはいかぬと攻撃する。又赤の方から見れば、ドイツの行き方になつてしまへば最早赤化の可能性はない、赤化の原因が無く

なる、機會がなくなるといふことを恐れて居る。従つて一方物を持つて居る資本家階級或は自由主義の人達は期せずして赤化勢力と合流するといふことが言ひ得ると思ふ。今日、日本の經濟政策が色々と行詰りを示してゐるが、これを以て世間では、全體主義のせゐだとしてゐるものがある。ドイツあたりでは甚だ迷惑だと云つてゐる。事實、日本の所謂統制經濟は實は、自由主義特にユダヤ的金融資本の立場とロシア式計畫經濟の行き方との、兩方の悪い部面を露呈してゐるものであることを私は特に指摘したいと思ふ。即ち人民戰線的統制の弊である。

勿論私はドイツやイタリアのやる事が一から十まで決して宜いとは思はない。併し乍ら彼等が今日まで實績を擧げて來た經濟財政のやり方、或は青年の指導、政治の機構に於て、日本の國體に反せぬ限り私は多分に用ふべきものがあると思ふ。彼等が非常なる犠牲を拂つてこの結果を收めるに至つたその方法手段に至つては、我我として何等躊躇することなく之を採用して差支ないと考へるのである。

4 日本の傳統とナチ的なるもの

根本の精神に於ても、上述の事を更に敷衍して言ふと、ドイツのナチ運動は復古運動であると言つたが、その復古運動たるや管に三百年、五百年、或は千年の問題ではなく人類初期の純朴雄健にして汚損されない潑刺たる本能に立還るといふのであつて、さういふ復古運動が自然日本式のものに到達するといふことは容易に考へられると思ふ。

日本の古神道とか或は家族主義とか或は一君萬民の思想とかいふものは、この大八洲に何千年の昔からあつたものである。そして今日地球上に於て、嘗て外敵の侵寇を被つた事のない國は日本しかない。この國は氣候風土が最も好適であるのみならず、戰略的に見ても外國から侵され難い要害の地勢を備へてゐるのである。

我々大和民族は自然に恵まれ、外敵に侵されず、何千年來徐々に而も健全なる發達を遂げて來たのである。其處に人間本能の最も良いものがそのまま残されて居る

ことは固よりである。彼の正倉院に千何百年か前の御物が當時の通りそのままに保存されて居る。これは日本だけにあり得ることであつて、他の國では如何に近代科學を應用した立派な倉庫を持つて來ても、ああいふ風に物が保存され得ない。これは日本の特殊の氣候風土の爲だといふ。木で造つた正倉院の建物は外の空氣が濕つた時には木がふやけて密閉され外氣を遮斷する、秋になつて乾燥すると木が縮んで隙間から外氣が入る、といふやうな原因があるといふ事である。何れにしても、あの正倉院の御物が今日まで毀損されず當時のままに残されて居ることは驚異である。我々の遠い祖先の質實剛健なる氣風が今日まで完全に保存されて來たことと一脈通ずるものがあるではないか。ドイツはヨーロッパの中原に位し、過去二千年頻繁なる戰亂に會ひ、思想も傳統も混亂し殆んど太古の俤を留めないほどに變つて居るのであるが、英雄ヒットラーが現れて以來、その數千年の闇を通じて本來のゲルマンの生活、思想を復活せしめんとしてゐるのである。人類の起原が一元か多元かは別問題として、所謂文明によつて墮落せざる原始の人間には、共通の美點があつた

らうことは想像に難くない。ゲルマンの森の中に於ける生活と日本のこの島に於ける古代の生活とは、そこに共通する或るものがあつたらうと思はれる。

従つて今日ナチが抱く思想系統が自然に日本に近寄り、日本古來の傳統に接近して來る事は當然であるやうに思ふ。而も今のナチの指導者達は日本の事をよく研究して居る。日本の皇室の事、日本の神道の事、その他のものに就ても非常なる研究をして居る。その結果それを參考にしたといふ點もあるものであり、根本に於て彼等の復古運動といふものが日本的なるものに還るのであるが故に、今日のドイツを以て一概に西洋のものであると言ふのは聊か單純過ぎるのである。

寧ろ英米流の思想が非常に浸潤した所の現在の日本よりは、ドイツの方が或る意味に於ては餘程日本的であるといふことも言へるのである。さうであるからして我がナチのやり方を一部採用するとしても、これは寧ろ我々自身のものにかへつて行くのであるといふ見方さへも成り立つわけであつて、ただ單に外國のものを眞似ると言ふことでは決してないのである。むしろドイツが日本のものを彼等獨特の方

法に依つて、殊に組織に優れたる彼等の方法によつて今日のやうな機構に作り上げた、之を採り入れることは日本から見れば、むしろ自然な形であるといふ風にさへも言へると思ふ。英米流の本來日本精神と相反するものとは大變違ふのである。議會を初め種々のデモクラシイ流の、自由主義的のものが、日本に、兎も角今日程度に植附けられる迄には半世紀餘りを要して居る。而も議會政治といふものが決してアングロ・サクソン或はアメリカ流のものになり切らない。如何に自由主義的の制度、組織が日本の國民性に合致して居らぬかといふことを示すものである。之に反してナチの組織、機構の或るものは數年の中にスツカリ日本に根が生えてしまふであらうと思ふ。何となればそれは日本の根本的なものに合致するからである。

二 あるべき新秩序の姿

1 自給自足の大地域經濟

三國同盟といふものは、さういふ國々との同盟であるが故にこれは極めて自然のことである。而もこの三國が今日の世界に於て絶大なる武力、經濟力、その他總ての力を持つた大國である。之に對するものは英米等の自由主義陣營であるが、この力の比較は今日に於ては餘程我々の方が優勢である。物質的に觀ても既に今日フランスは事實上亡びた。イギリスは正に氣息奄々、その没落も既に時の問題である。アメリカだけが今日この全體主義の大波が押寄せて來るのに慌てて一生懸命軍備を施して居るのであるが、最早や戦争といふことから觀るならば勝敗の決は明かである。問題は然らば今後三國が如何にして新世界を作るかといふことに歸するのであ

つて、その三國の指導に依つて出来る所の新しい世界がどういふ形を探るだらうかといふことを假りに想像して見ると、これは今日のドイツやイタリアの國內の政治、又日本の建國の理想に當嵌めて見ると大體見當がつくのである。

今日ヨーロッパの新秩序、又大東亞新秩序といふことに就て何人も言ふのは自給自足といふことである。自給自足とはその最も原始的なる形に於ては農業に依つて衣食する生活を謂ふのである。つまり交換といふものが人間の生活に於て殆んど必要がなかつた、或は殆んど考へられなかつた時代を想像して見ると、これは完全なる自給自足である。併し乍ら初期の世界人類が營んだところの自給自足は人間の生活と動物の生活と殆んど似て居つたかも知れぬ。色々な物質的な點に於て非常なる不便があつた極めて簡易な生活である。今日さういふ生活を我々が再び營むことは出来ない。兎も角物質文明がこれまで進み、最早や我々に取つて缺くべからざるものである以上、さういふ簡単な生活は到底出来ぬのである。従つて今日言ふ自給自足は當然之を營む地域の非常に廣大であることを必要とする。昔の部落の自給自足

といふものでは到底いけないのみならず、昔の封建時代のやうなものでもいけない。近代國家でもまだいけないのであつて、そこに數箇國を併せた所の所謂大地域經濟といふものが必要になつて来る。

2 ヨーロッパの自給自足圏

ヨーロッパの自給自足圏に於ては獨伊を中心として殆んど總ての國々がこの圏内に包含され、更にアフリカをも加へるに至るであらう。而して自給自足を營むのは、その圏内に於ける各國の間に、從來の如く小さい國も大きい國も絶對主權を主張し、國境を設け、税關を設け、貨幣を別々に持つ、さうして小さな國までが軍備を持つ、さういふことであつてはならぬのであつて、その間には言はば國境は殆んど撤去されなければならぬ。さうして各民族が各々自然の條件に即した生業を營み、農業に適したものは農業をやり、工業に適したものは工業をやる。それぞれ完全なる分業をやる、その間に生産の重複がないやうにする。さうすると、非常な無駄が

省けるのであるから、今日のヨーロッパの同じ物質的條件をもつてしても、各民族の生活程度は非常に水準を高めるだらうといふことが直ぐ想像される。不必要なる競争がなく、生産に重複がないといふことであるなら、ヨーロッパの生活水準は必ず高まり、生活が豊富になることは問題はない。

かういふ風になつて來ると最早や從來のやうに國境を接して互に反目するとか、他の市場に對して競争をやるとか、さういふ今日まで人類の間の戦争の原因となつた所のものが大部分除かれてしまふ。各民族がその分に應じた天然の素質に適した民族生活・國家生活を營んで、その間に完全なる共存共榮の實が擧げられるといふことになると思ふ。獨伊の側では、日本の、萬邦をしてその所を得しめ共存共榮の實を擧げるといふことを、さういふ風に解釋して居ると思ふ。

日本の理想とする八紘一字といふものも、その行き方は滿洲・支那、更に今後南洋諸國に對して大體に於て同じでなければならぬ。勿論、日本の八紘一字は常に、天皇を絶對の御存在即ち現人神として仰ぐ建前であるから、之はヨーロッパの自給

自足圏或は新秩序の觀念とは餘程違ふのであつて、そこに神といふ觀念がある。絶對者に關する人類のまつろひといふことが入つて來るのであるから、これは結局、人類世界、地上の文化發達の最終の段階を示すのであり、従つて今直ちに之を全世界に及ぼすといふことは事實に於て時期尙早であり又我々が今日餘りその點を外に向つて高調することは考へものであると思ふ。併し乍ら獨伊の行き方は大體に於て、日本の八紘一字の觀念に合致して居る。彼等に依つて先づさういふヨーロッパの社會が出來たならば、今後日本の 天皇を中心とする所の全世界の新秩序、所謂萬邦をして各々其の所を得しめ、兆民をして悉く其の堵に安んぜしむるといふ、先般の御詔勅の理想に達する大きな一步となるのである。

であるから三國同盟は日本の肇國の精神から見て非常に重要な條約である。この條約に謳ふ所の世界新秩序は日本の八紘一字の精神である。日本の肇國の精神が三國同盟の精神であるといふことになつたのであるから、その意味に於て我々の責任も非常に大きい。寧ろ日本がドイツやイタリアをして今後の行き方を誤らしめない、

即ち従来アングロ・サクソン或はユダヤ人がやつて来たやうな弱小民族搾取といふことを彼等をして爲さしめない、彼等の世界觀をあくまでも健全に保たせて行く、我々はさういふ精神的の指導者といふ役割をあつた條約に依つて自ら引受けたといふ自覺を持たねばならぬと思ふ。

3 大東亞の共榮圈

ヨーロッパの新秩序に就て言へば、大雜把であるが今述べた通りであつて、同じやうなものを東洋に於ても作らなければならぬ。即ち東洋に於ても自給自足を營む。さうなると従来我々の經濟活動といふものが、ここに大きな轉換を遂げなければならぬ。従来はアメリカ及びイギリスの植民地から原料を得て之に加工し、さうして之をまたアメリカ及びイギリスの植民地に賣る、その金を以て又原料を買ふといふことを繰返して来たのであるが、これは言はば日本といふものが國を擧げて勞働者となることであつた。即ち我々は英米の奴隸といふ境涯にまでなり下つたのである。

さうであるが故に日本が特異の立場から大陸に進出するにしても、或はその必要上、獨伊と結ぼうとしても中々出来なかつたのである。英米から急所を掴まれて居るのであるから中々独自の外交も出来なかつたといふのが従来日本であつたが、今後はこのアジアの東南部の、世界に於ける最も豊穡なる地域が、アジア民族の爲めに開放されることになるのである。

従来イギリスなりフランスなりオランダなりといふものの繩張りであつて、充分に我々に利用させなかつたアジアを、今や完全にアジア人の手に取り返す。さうして従来アングロ・サクソンがやつて来たやうな、強者が弱者を虐げる、之を搾取するといふやうなことは今後は拋棄する。之に反して日本の皇謨に基く所の共存共榮の精神に依つて各民族がお互に協力する。さうしてその必要な物を此處に生産し、お互に有無相通じて完全なる自給自足の大きな經濟領域を作る。而もこのアジアの經濟領域は所謂モンソン地帯に屬するのであつて、この領域に於ける民族は米を食つて生きて居る民族である。かく主食を同じくするモンソン地帯の民族が協同

の經濟圏を作るといふことは極めて自然の條件を其處に備へて居るものと云へる。それ故にアジアの經濟圏はアメリカ或はヨーロッパの自給自足經濟圏に比して、更に此處は完全なるものである。又物質の上から言つても、アメリカには足りないものがあり、ヨーロッパにも尙更足りないものがあるのであるが、アジアに於ては無いものは殆んどない。現在の處ではまだ機械類とか、重工業品は足りないと言ふかも知れぬが、これは將來日本の工業が発達することに依つて、完全に我々は自給自足が出来るのである。

大東亞の自給自足圏が確立されたる曉に於ては、アジアは他の世界に多く求むるものはない。而もこのアジアに於て他の民族に比して最も優れたる日本民族がその盟主であつて、この日本民族は人口の上から言つても相當の頭數を持つて居る。この日本民族によつて率ゐられて行く所の大東亞の經濟圏といふものが今後目覺しい發展を遂げるであらうことは疑ひないことであつて、その爲めのあらゆる條件が備はつて居るやうに私は思ふ。併し、この多數のアジア民族を率ゐて他の侵略に對し之を守るといふことは實に大きな負擔であり、大事業であつて、アジア共榮圏の中核となる處の日本民族に負はされた責任は洵に重いと云はなければならぬ。

三 新秩序と日本の將來

1 日本の發展的大機

目前の日本の國際間に於ける立場から見て、國防國家を作らねばならぬといふことが頻りに言はれるが、その國防たるや單なる受身であつてはならない。即ちアメリカに對して日本を護る爲め、或はロシアに對して日本を守る爲めといふやうな受身であつてはならぬのである。何故ならば國防國家の必要は、我々がアジア諸民族に對する責任を果す爲めに力を持たねばならぬからであつて、さういふ積極的意味合ひからする國防國家が必要なのである。斯う見なければならぬと思ふので、その

意味に於ては國防國家といふ言葉は稍々消極的で面白くないと思ふが、要するに我
我は單に軍備だけではなく、精神的にも第一に日本の肇國の健全なる理想に立ちか
へる、さうして國內の政治經濟を最も合理的に日本の國體に即したものに出来る限
り短時間に改めて行かなければならぬ。斯くして内の姿勢が整つたならば私は日本
のアジアに於ける使命の達成は決して困難ではないと思ふ。三國同盟により日本は
單に精神的のものだけでなしに、現實の世界に於ても獨伊といふ有力なる協力者を
得たのであるから、日本の國際間に於ける地位は非常に強化されて來た。例へば北
方の脅威であるソ聯に對しても今日の日本の立場は非常に好くなつた。支那事變の
如きも私は日本の決意次第で必ずしも徹底的に蔣介石を叩きのめさないでも解決出
來ると思ふ、又それをやるべきものであると思ふ。さういふ風に外交の關係が非常
に好くなつて來た。さうして南の方は今日、幸にして從來この地方を領有して居つ
た所の本國が何れも皆潰れつつあるのであるから、日本のなすがままに任せて居る
といふ狀況であつて、この機會こそ日本としては洵に千載一遇の重大なる時機であ
る。この重大なる時機を我々が徒らに過したならば、それこそ祖先に對して相濟ま
ず、又子孫に對しても我々は洵に申譯ない次第である。現在の日本民族に負はされ
て居る責任が如何に大きなものであるかといふことを、一つこの際、日本國民が何
人も深く自覺しなければならぬ。

今までの日本は七千萬の人間が誰も彼も食ふことを考へなければならなかつた。
——子供から大人、小學校を出てから大學に至るまで、どうしたら生きて行けるか
といふ、その根本の動機に依つて學校に於て勉強し又社會に働いて來た。随つて大
きく物を觀る餘裕がなかつた。國內に於てもお互に排斥し合ふ、うっかりして居れ
ば食へなくなるから、氣の毒だけれど自分の同胞を押しつけてでもやらなければな
らぬと云ふのが今日までの日本であつた。其處へ持つて來て英米流の資本主義的、
弱肉強食の人生觀が植附けられたのであるから日本は何時の間にか完全に彼等の手
中のもとなり、而も英米の如く天然資源がないものであるから一入淺ましいもの
になつて來た。然るにこれが愈々行詰つた時に大陸進出が可能となり、更に無盡藏

の豊庫である南洋が我々の眼前に開かれたのであるから、日本人の地平線は非常に廣くなつて來た。

さうなつて來ると我々の從來の考へ方は根本から變へなければならぬ。單に經濟の問題にしても、この島で七千萬の人間が食つて行けるかといふ問題ではなくなつて來た。資源は無盡藏に南の方にあるのであるから、最早飯を食ふといふことは問題ではなくなつて、飯を食ふ以上に人間として如何なる事をしなければならぬかといふことが非常に重要な問題となつて來た。

2 視野の擴大を要望す

今日國防國家の必要が叫ばれるのも實はさういふ立場から見ても初めて解るのであつて、從來のやうに、西洋の諸國がアジアの良い所を占めて居つて、日本はどうしても伸びることが出來ない、狹隘な領土内に生活し、足りない物は外國から買ひ、之に加工してそれを外國に賣つて食つて行くといふ状態であつては、國防國家或は

軍備充實といふやうなことを言ふのは贅澤ぢやないかといふ議論さへもあつたのであるが、今日は食つて行くといふことが問題ではないのであつて、資源は無限にあり、我々の努力次第では如何なる力も貯へ得るといふことになつたのであるから、大々的に國防の建設をやるのは勿論、國內問題の解決に就ても労働問題がどうか小作爭議がどうか、さういふ風にものを小さく見てはならぬと思ふ。勿論、今まで惠まれた位置にある人、物を持つた人から見れば、從來通り我利我利一點張りで行くのが都合がよいであらうが、今日はそれは許されぬ。今や南方の廣い領域が開放されたが、之を完全に利用するには非常なる努力と年月が要る。その過渡期をどうして行くかと言ふに、之に對しては先づ物を持つた階級が、第一に所謂公益優先の精神を發揮しなければならぬと思ふ。同時に又所謂持たざる者、從來虐げられて來た社會の階層も前途にさういふ大きな希望があるといふことで、目前の苦痛には堪へて行かなければならぬ。

從來日本の狭い領域内で問題をどうにかしなければならぬといふことが日本人を

憂鬱にしたのであるが、我々の天地が非常に廣いものになつて、皆が氣分を大きくして問題を考察し得るやうになつたといふことが、私は日本民族の爲めに非常なる仕合せなことだと考へるのであつて、今日迄のやうに、目前の三年餘りの戦争の結果、非常に物が足りない、色々苦しいことがあるといふことばかりに國民の注意を集中し、日獨伊同盟が出来た結果、或は英米と戦争しなければならぬかも知れぬ、又一つ國難が増した、もつと大いに皆が滅私奉公をやらなければならぬといふやうな物の言ひ方は、私は根本に於て間違ひであると思ふ。それは却つて國民を奮起せしめる所ではないのである。今述べたやうに、日本の今日の立場、今後の日本國民の進むべき途を説明したならば、何人もよく分るであらうし、又これは決して單なる空想ではない、現實の我々の直面した場面なのであるから、一人でも多く斯ういふ風に日本國民がものを考へるやうになつて貰ひたいと希望する次第である。

(皇紀二千六百年十月講演)

第七章 日獨伊同盟と新體制

日獨伊三國同盟の成立は世界の新舊兩勢力の對立を愈々明確ならしめ、新秩序と舊秩序の性格の差を益々鮮明にした。

惟ふに今日世界が兩陣營に岐れてゐるといふことは、單に利害の對立とか、覇權争ひではない。思想的にも、文化的にも、道德的にも、政治軍事あらゆる分野に於て、兩者の相反は極めて分明なのである。

それ故に、日本が三國同盟を結んで、新秩序陣營に投じたといふことは、今後の日本の國內體制にも至大の影響を齎すことは勿論である。外交上デモクラシイ諸國との合作が全然不可能となつたのみならず、國內諸般の問題も是等の自由主義諸國の影響を受けて、過去半世紀に互り出来上つた多くのものを、此の際、根本的に再

検討しなければならなくなつた。

尤もこれは獨伊と結んだ爲めにさうなつたのではなくして、世界史必然の動向がそこに在るのであつて、この十數年來日本はいやでもその方向を辿りつつあつたのである。ただ外交政策の根本が決まらなかつたが故に、從來國內の轉換も甚だ遅々として、その間に不必要の摩擦も多かつたのであるが、今回愈々獨伊との提携が出来、畏れ多くも大詔を渙發せられ、最早や國民の歸趨は確定したのであるから、今後の日本の政治・經濟の體制を如何にすべきか、即ち所謂新體制が如何なる性格を有すべきかについては、今日何等疑問の餘地は存せぬ筈である。世上、翼賛運動等について色々の論議が行はれ多くの非難も耳にするのであるが、是等は何れも上述の根本理念を把握せぬ結果か、然らずんば、枝葉末節を不當に重視する結果ではあるまいか。我々は獨伊と提携したるが故に、今後の日本の政治、經濟、文化、一切に就て、獨伊に追隨せよと云ふが如き主張をするものでは毛頭ない。

大政翼賛會もその根本精神を巨道實踐の一點に置くが如く、日本の革新は常に復

古の道に由るのであつて、國體を明徴にするといふことが、日本革新の要諦でなければならぬ。ただ我々の見る所を以てすれば、獨伊全體主義の行き方は大體に於て日本國體の本義に近似するものがあり、彼等の革新政治に具現せられたる組織、技術、方法には日本として多分に參酌すべきものの存することを強調して來たに過ぎないのである。

今日までの日本の所謂統制を以てファッショ式、或はナチ式と考へ、之が全體主義なら眞つ平御免だといふ聲を屢々聞く。獨伊としては甚だ迷惑なことであらう。形式が獨伊の方法と似て居ても精神が違つて居つたり、或は寧ろソ聯的のものであつたり、又さうでないとしても、日本特有の事情を考慮に入れず翻譯的に施行されてゐる部面もあると思ふ。統制の行過ぎ或は不成績を以て、直ちに全體主義を呪ひ、延いて三國同盟にまで難癖をつけんとするが如きは、思はざるの甚しきものである。

自分の見る所では、目前日本の新體制運動はその經濟部面に於て餘りに倫理的觀點或は社會正義的考慮が強調され過ぎては居るまいか。勿論、自由主義的資本主義

の行過ぎを是正する爲めには、一種の反動としても當然過ぎる現象ではあるが、これは君民一體の日本の建國の精神が明徴となり、陛下の赤子たる日本臣民の性格が明かに認識されるならば、西歐諸國に於けるが如き階級鬭争心理を利用し、激發する必要は毫も存せざる筈である。何れにしても専ら之は政治及び思想の分野である。經濟の問題としても勿論この根本精神は無視さるべきではないが、日本の現狀に於て目前最も力點を置くべきは生産の擴充であり、國防國家の建設である。國際情勢に照し、聖戰三年有半の日本の現狀を顧みて、これこそ一日も忽せにすることの出來ぬ焦眉の問題である。歐米流の理論鬭争に没頭して、生産力の低下を顧みないやうなことがあつてはならぬ。この點でもドイツが僅か數年の間に彼の絶大なる軍備を完成した歴史こそ、吾人の最も學ぶべき點である。國防國家完成途上に於けるナチ・ドイツに於ては經濟倫理などは餘りやかましく云はれなかつた。結果に於ては、今日の獨逸に於ては如何なる自由主義の社會に於けるよりも社會正義が立派に確立されて居るが、ヒットラー總統治下に於ては所有權がどうの、營業權がかうのと、

謂はば小兒病的な末節には拘泥せず、人間そのものを社會化するといふ一般精神を以て一切を律した。この點、君民一體の大家族國たる日本に於ては、本來の國家の姿に歸りさへすれば何等問題は無い筈である。

何と云つても今日の問題は一にも生産擴充、二にも生産擴充である。食ふものを食はないでも生産を擴充しなければならぬ。日本の運命、全アジアの運命が一にここに懸ると云ふも過言でない。(皇紀二千六百一年一月)

第八章 國防國家體制を確立せよ

一 何故に國防國家を必要とするか

1 國防國家のための新體制

外交の轉換を契機として、國內に於ても昨今新體制を要望する聲は津々浦々に喧しい。大政翼賛會の成立はこの要望に拍車をかけた。いや、一般に翼賛會は新體制の確立を以てその使命とするにさへ考へられてゐる。然らば抑々新體制は國內の情勢に迫られて要求されるのか、それとも海外の事情がこれを必要とするのであるか。勿論國內事情を外にして新體制といふものが論ぜられる譯はないのであるが、今日、

日本が新體制を急務とする理由を、主として、内に求めるか、外に求めるかによつて、新體制そのものに對する考へ方が大きく變つて來るといふことを我々は先づ考へなければならぬと思ふ。

内の必要によつて新體制が唱へられるのは、大體に於て從來の日本に於ける革新運動がそれだつたと私は思ふ。即ち過去一世紀近く、日本が西洋の文化を取入れ、政治に於ても、經濟に於ても、所謂自由主義的な或は資本主義的な體制を採つて來たが、それに伴ふいろいろの弊害を如何にして是正するかといふことが、從來の日本における社會運動であり國內改造運動であつた譯である。之はしかし自由主義の弊害を是正するといふのであるからして、實は日本だけの問題でなしに世界各國共にこの問題が取上げられ、既に或る國々においては革命的變動を見てゐることは周知の通りである。日本に於ても専らその立場から日本の新體制、即ち革新といふものの必要が叫ばれて來た。

今日と雖も日本に於てその必要、その事情が熄んだ譯では勿論ない。併し乍ら、目前の内外の情勢を大觀すると、日本の新體制を必要とする理由は國內の事情を外にして海外から來る所の原因、外力の壓迫と云ふか、環境の變化といふものが専ら考慮されなければならぬやうになつて來たのである。

今日新體制の目的は何であるかと云へば、それは所謂、國防國家の建設であるといはれてゐる。翼賛會の目的、綱領は臣道實踐の一語に盡きる。その上何も具體的な綱領とか、目的は掲げなくてもよいといふので掲げられなかつた。併し乍ら、準備委員會の當時から目的は國防國家の建設だといふことは一般に諒解されて來てゐるのである。即ち國防國家を作るための新體制であるといふことが、今日の一般の觀念、また要求となつてゐる。従つて從來の國家・社會の革新或は改造、さういふものための運動とは、大分性格が變つて來たといふことは明かである。この點をはつきりさせることが目前の新體制運動をして不必要なる摩擦を起さしめず、一億一心となつて目的達成に向ふために極めて必要なことではないかと私は考へる。

今日各方面に於て新體制の根本理念を何れに求めるかといふことに就て、相當に

意見の對立があり、相剋摩擦があるやうに考へる。たとへば經濟新體制といふことに就ても、その根本の目標を何處に置くかといふことに就て意見が分れ、國防國家建設の爲に日本の經濟組織をその目的に沿ふやう改めるといふのが目的であるか、それとも改革の爲めの改革即ち新しい經濟倫理を確立する、社會正義を實現するための新體制か、といふこの二つの何れを本旨とするかによつて結果は非常に變つて來るのである。今日、政府當局或は行政部門において色々の施策がなされつつあるが、この二つのこと、即ち國防國家建設といふことを主たる目的とするのか、或は新しい經濟倫理、社會正義を確立せんとするのか、その何れに重點を置くのかといふことに就て意見の對立がありはしないか。若し今日相剋摩擦があるとすれば原因は専らこの點に關する意見の相違に歸すべきであると思ふ。

勿論、國防國家を作るといふことは、今日の日本の環境を見れば、どうしてもなさねばならぬことで、之はいはば至上命令なのである、併し乍ら、その爲めに經濟倫理、社會正義といふものを全然無視してよいといふのでは毛頭ない。實を云へば

觀念としてはこの二つは明かに異なつたことのやうに見ることが出来るのであるが、併し今日の國防國家といふ觀念は、同時に從來の資本主義的な或は自由主義的なあらゆる缺陷を是正するといふことを厭やでも必要とするのであつて、國防國家と云ふことが國防上の絶對必要に出發しても、結果に於ては新經濟倫理が其處に生れることになるのである。ただその觀點を何處に置くか、何れに最も重きを置くかによつて、目前の實際の政策を加減する上に大變な違ひを生ずると云ふのである。

2 國防國家の全體性

抑々國防國家といふのは全く新しい考へ方であつて、政治、經濟の上に於て所謂全體主義的世界觀といふものが現れて來て始めて生じた現象である。從來の國防充實といふこととは大に意味が違ふ。今日アメリカが有り餘る金力、有り餘る工業力、天然資源、或は人力さういふものに飽かして絶大なる軍備をなしつつあり、國を擧げて再軍備に没頭してゐるが、それかといつて今日のアメリカが國防國家の建

設を志してゐるとはいへない。デモクラシー、自由主義、資本主義をそのままにして如何に軍備を増さうとも、國を擧げて兵器廠となさうとも、アメリカには國防國家は出來得ないのである。またルーズヴェルト大統領を初めアメリカ政府識者も國防國家的觀念には擧げて反對してをり、全體主義のやり方には彼等は常に激しい攻撃を加へてゐるのである。無論國防上の考慮、軍備充實の必要よりして勞働者に對する從來の法規を是正するとか、ストライキを起させないとか、個人の利益追及を制限するとか、目前の政策は多少全體主義的の行き方を示すかも知れないが、根本に於てはアメリカが獨伊の政治經濟の理念とか、日本の建國の理想、國體の本義に多少でも讓歩し、一步でも之に近寄らんとするといふのでは決してないのである。

日本に於ても國防國家といふことを果して凡ての人がさういふ意味に見てゐるかといふと、其處に私は大いに疑問を抱くのである。第一、日本の場合誰でもが「高度」國防國家といつてゐるが、この國防國家といふものが從來の國家觀念、經濟・政治に對する觀念を離れた新しい思想であるとするならば、これに高度といふ形容

詞を附けることは言葉は強いやうであるが事實は逆である。高度の國防國家といふのならばまだわかるが、普通に高度國防國家といつてゐるのは即ち戰車・飛行機・軍艦、さういふものを澤山具ふところの高度の國防を有つた國といふ風に取れるのである。さうすれば、從來の軍備充實計畫と大なる相違はない、ただ分量の問題だ、といふことになるのである。

然るに新らしい全體主義諸國の軍備、彼等のつくつてゐるところの國防施設といふものは、彼等の社會機構・經濟機構・政治機構といふものと密着し離れることの出來ない關係にある。さういふ國家社會の機構を變へることによつて、彼等の觀念する所の國防國家即ち所謂全體戰爭、總力戰爭に堪へうるところの國家體制をつくり上げるといふことにある。

さうであるからして日本がいま國防國家を作るといふことを極く安易な氣持で唱へて居るならば、私はこの新しい觀念、新しい言葉の誤用であると思ふのである。從來國防の必要は主として軍部で強く唱へてゐた。これに對して政治家は常にこれ

を抑制することに努めた。従來の政黨は軍事豫算を削減するといふことを以てその重大任務として來たのである。若し今日唱へられるところの國防國家が、單に高度の軍備を持つといふことならば、これに對して一部の政治家は頭を捻るだらうと思ふ。

國防國防といふが、何も彼も國防のために犠牲にしてはいけない。先づ第一に國民の生活を安定せねばならぬ、食ふものを食はずに國防もないだらうといふ議論も當然起つて來るのであるが、今日高度の國防を必要とするといふことには流石に國際關係に盲目でない以上何人も反對しない、往年の政黨の如く議會が軍事豫算を削るといふことはしないと思ふ。が併し、根本に於てこの國防國家の觀念をどう把握するかといふことによつて、その國防國家を作る熱意、それに努力を集中する程度が非常に變つて來る。

のみならず、之が爲め如何なることをなさねばならぬか、政治・經濟を如何にすべきかの問題が根柢から性質を變へて來るのである。現に今日の産業人或は財界人

の言ふ所は凡て國力の限度に依る外はないといふのである。國力の範圍で國防をやる、これは勿論一應正しいのであつて國力を越えて出來るものではない。併し乍ら、従來の物の考へ方に基いて國力を算定するとなると、ドイツやイタリア、日本のやうな所謂持たざる國は、どうしても英米のやうな持てる國とは國防上競争が出來ぬことになる、一生うだつが上らぬことになる。それで泣き寝入りになるのは敗北主義である。何處をどうしても必要にして充分なる軍備を整へるだけの國力を捻出しなければならぬのである。

かういふ事情に促されて獨伊はあの全體主義の體制をとつたといへないことはない。勿論さういつた偶然の、單に目前の國家の必要とか或はその指導者の欲するところの政策實現のための卑近なる動機だけではなく、世界全體として、今日の所謂全體主義運動は、これは歴史の過程において當然到着すべき段階に達したものであつて、更に高く或は深い理由がそこになければならぬものである。然し國防の問題でいふならばこの實際上の必要が獨伊の革命を餘儀なくせしめたものであり、ま

たこれが最も有効であつたといふことがいへるのであつて、今日、日本の場合も同じ場面に突き當つてゐるのではないかと思ふ。ただ併し乍ら、日本の場合は日本の國家理念は開闢の昔から萬古ゆるぎなき礎の上に樹てられたものである。従つて日本の場合は國體といふものとは關係なしに、目前の國防の必要といふことだけに問題を限局して考察することが出来る。

また實際問題としてもヒットラーが十數年苦心をし、ムッソリーニが同じく二十年近くも努力してあの體制を作り上げたが、さういふ努力は日本の場合實は必要がない。日本は從來の外來思想、自由主義的なる思想を拂拭すればそれで直ちに本來の姿が取返されるのであるからして、この點日本の政治家は獨伊の指導者などよりは恵まれてゐると思ふ。

3 「國力」の新しき定義

併し乍ら日本に於ても多くの人のいふ國力とは何を意味するのか、國力に對する

見方、考へ方といふものが非常に大切になつて來はしないかと私は思ふ。單に目前の日本の需要に充てられ得るところの資源、或は人的物的の力、さういふものを從來の尺度から計つて、これだけの興へられたる財源、資源、領土人口から、これだけの力が出て來る——つまり、從來の自由主義經濟の立場、或は自由主義の政治觀念、さういふものから割出した所謂「國力」なるものと、全體主義的な世界觀に基く「國力」の判斷といふものとは大きな開きを生ずるのである。

アメリカの如き、またイギリスの如き、過去において蓄積したものが殆んど無盡藏といつてよい程ある國々に於ては、必要な戦車や飛行機・大砲、海軍力を作るにしても有り合せの力と財力、材料で充分であつて、こんな觀念の區別は必要でないかも知れない。現にアメリカ邊りでは必要なものを造るだけの力が有り餘るから、むつかしいことは云はずに目前必要なものは何でもどしどし作つてゐる。

これに反して日本、ドイツ、イタリアでは今日全體戰爭が必要とする國力を發揮するためには、どうしても從來の觀念に捉はれて「資本はこれだけしかない、材料

もこれだけしかない、人口もこれだけしかない、これが我々の国力の限度だからこの限りにおいて軍備をするのだ」といふのでは、これは到底英米と匹敵することは出来ない。ドイツが全體主義的政治・經濟の體制を作り、またイタリアがああ體制を作り、そして今日の軍備を作り上げたといふのは、彼等が從來持つてゐたところの所謂国力なるものが、舊式の考へ方では到底その必要とする軍備を整へるに足りなかつたと云ふことが大きな刺戟になつてゐることは争へない。

今日、日本の政治家が第一になすべきことは從來の外來思想に基いた国力算定法を一擲して全體主義的立場から日本の「国力」を計るといふことではないかと思ふ。たとへば從來は、これは經濟人のいふことであるが、日本の国力といふものに就て大體資本の分量といふものを決定的のものと見るのである。明治以來日本に於て蓄積されたところの富、資本の額がどれだけあるか、それを越えるところの軍備はこれに不可能であるといつてゐるのである。併し乍ら、その標準で日本の国力を計ると支那事變三年半、既に日本の力は限度に達しつつあるといへるのである。このう

へ更に國防施設を整へるといふことは殆んど不可能な状態にあるのであるから、厭やでも從來の觀念を改めて新しい国力に對する算定方法を考へ出さなければならぬ。單に人口、土地或は蓄積資本といふやうな所謂生産の要素、これを機械的に數へあげて、これが日本の国力だといふ簡単な敗北主義の考へは、この際根本的に排除せねばならぬ。これは直ちにもの見方、考へ方を根柢から變へることになるのであつて、國防國家の觀念はさういふ事物に對する根本的な考へ方の轉換、いはば價値といふものに對する再評價、それを含むものであるといはなければならぬ。

若し今日國防國家といふことを日本一般の人達がさう見るならば、從來通りの政治・經濟の體制によつて國防國家が出来るか出来ないかは極めて明瞭になつて來ると思ふのである。であるから、私が最初に經濟倫理・社會正義といふことと國防國家を作るといふこととの二つは別の觀念で之を混同してゐるところに相剋摩擦があると云つたのは、觀念としてはさういふ區別が出来るのであるが、實際において本當の意味の國防國家を作るならばその過程に於て、いはば副作用として新しい經濟

倫理の確立は必然であるといふことを含めていつた譯である。

4 日本に迫る全體戦争

然らば今日、日本がさういふ國家體制を、政治・經濟の體制を何故採らなければならなくなつたか、國防國家建設を餘儀なからしむる外界の情勢はどういふものであるかといふことになつて來るのであるが、自然これは日本の直面する所の外交關係に關するのである。以下極く大體、日本の直面する國際關係といふものに就て述べて見たい。

日本がこの際一日も速かに國防國家體制を整へることを必要とする海外情勢如何と云へば、勿論第一には現在の日本と世界の主なる國々との關係、これを考慮しなければならぬ。申す迄もなく現在日本とアメリカの關係は相當險惡である。一觸即發とは行かぬが、極めて常識的に考へても今日アメリカが云つてゐること、してゐることを見れば、日本としてこれに晏如たることが出來ないのは當然である。

支那においても我々は既に三年半戦争をしてゐる。その終局がどうなるかといふことは今の所見透しは困難であり、何れにせよ今後も相當の勢力消耗は必然である。また、日本は周知の通り日獨伊同盟を結んで大東亞共榮圈を作る決意を表明した。これが完成は南方アジアの廣大なる領域を、從來の如き白人の搾取、白人の虐政から解放することを意味するのであつて、到底、無事平穩には達成し得ない大きな事業である。

さらに日本と境界を接してゐるソヴェート・ロシアは第一次、第二次、今日では第三次の五箇年計畫を行ひ、その結果歴大なる工業、歴大なる軍備を持つに至つたのである。勿論、私はソヴェートと日本が衝突するといふことを前提とするものではないが、國境を接し必ずしも利害の一致しない國が非常に歴大な武力を蓄へ、そして益々その軍備を増しつつあることを擧げるのである。

かういふ環境の下において、日本が現在程度の軍備、現在程度の工業力をもつて安んじてをられないことは極めて明瞭である、故に日本の軍備の必要といふことは、

かういふ環境に置かれれば何れの國においても當然生じて來るのである。ことに、今日の所謂全體戦争の時代において、その必要は殆んど絶對的であるといふことを考へなければならぬ。

5 全體戦争、全體軍備の實體

近代軍備といふものは、今日ドイツの持つてゐる裝備を見ても、ソヴェートのそれを見てもわかるやうに、その特徴その重點は機械化といふことである。従つて、非常なる巨額の物資特に鐵を大量に必要とするのである。而も機械化戦争は非常に消耗率が大きい。或る軍事評論家の計算によると、今日の世界の一等國が一年間戦争をするには四千萬トンからの鐵が必要であらうといはれてをる。従つて軍需工業力といふものは我々の從來想像し得なかつた程大きなものを必要とするのである。

今日ドイツは既に二萬五千臺の飛行機を持つてゐるといはれてをり、ソヴェートも勿論二萬臺以上のものを持つてゐることは申す迄もない。戦車にしてもやはり何

萬といふものを今日造つて持つてゐる。そして飛行機にしる戦車にしる、その性能は非常に優れてゐる。さういふ性能の進んだ機械化兵器を多量に持つてゐるといふことが全體主義軍備の特徴である。

そしてさういふ軍備を持つところの軍隊の間に闘はれる戦争といふものは從來の戦争に比較して非常に悲惨なもので殲滅的結果を必ず來さなければ已まぬ、敗けた方は殲滅されるといふのがその特徴である。フランスはフランダーズでドイツの機械化部隊に敗れて百數十萬の捕虜を出してゐる。精銳なる機械化部隊に對しては、歩兵といふものはただ手を舉げて降伏するか、さうでなければ悉く戦死するか、それ以外にはない。

アフリカでイタリアが敗けたといふが、私はあの戦争はさう大した戦争ではなかつたのではないかと思ふし、また敗けたといつても從來の戦争の程度を多く出てるとは思へない。併し乍ら軍團長が捕虜になつたとか師團長が捕虜になつたといふやうに後方司令部までが瞬間にして敵の攻撃を受けたといふことである。今日では

戦車にしても一時間に七十軒も走るものであつて、苟くも機械力の弱いものは完全に殲滅されるのが今日の戦争の特徴である。

私は今日、日本の軍備が、どの程度に發達してゐるか知らないが、恐らく支那事變三年半の間、日本は單に消耗だけをやつてゐたのではなく、他方において建設をやつてゐるのであるから無論軍備も大いに進んでゐるに違ひない。併し外國方面では日本の裝備特に工業力に就て極めて芳ばしくない評價をしてゐる。或るものは日本はポーランド程度である、良くてイタリア程度である、工業力からいへば五等國だとかういつてゐる。日本の現在持つてゐる裝備に就ては彼等は決して高く評價してゐない。その裝備を作る所の工業力に對しては猶更さういふ考へを持つてゐるのであつて、實際は果してさうであるかどうかは別問題として、外國筋が日本の實力をさう見てゐることは日本としては外交を推進する上に非常に不利なのである。

近代戦が殲滅的なものであるといふことを考へると、日本の軍備並に工業力が急速に増進されなければならぬといふことは何人も疑はない所であるが、今日、それ

ほど國民の頭にこの點が印象されてはゐないと思ふ。なるほど、日本は人的素質に於いては何國にも劣らない忠勇無比の國民であり、いざとなれば一命を甘んじて君國の爲めに投げ出す。かういふ精神的、人的要素で固められた軍隊は、外に多くはないのであるが、如何にせん、今日は機械がものをいふ程度が非常に増して來て、人がものをいふ程度が減つた。一度戦争になつて機械力が違ふと人間の忍耐、勇氣を以て持ち耐へる望みは非常に少いのである。

この前の日露戦争の時には、ロシアの軍備は恐らく日本の十倍以上もあつたし、そして、彼等の大砲は日本のそれよりも射程が長く、更に日本になかつた機關銃その他の新兵器を持つてゐた。併し、あの當時の軍備ならば、その開きが大きくても人間の力といふものが多くものをいつて、肉弾を以て當り得たからして、我々は、ああいふ輝かしい勝利を得たのである。併し今日は機械化部隊が主體であるから、裝備に格段の差があつては、それを繰返す譯には行かない。機械には機械を以てしなければならぬ、韋駄天と汽車では競走は出來ない。

併し乍ら、日本は大陸と離れてゐるから安全だといふ考へを持つ者もあるかも知れない。また、滿洲は廣いからさう心配はないといふかも知れないが、一時間に七十軒も走る戦車隊の時代となつては、滿洲が廣いといふことも頼りにはならない。日本海の如きも、今日の性能の優れた飛行機を以てすれば、瞬時にして飛び越すのであるから、軍備を整へるといふことは、國そのものの浮沈、國民全體の生死に關する問題である。

二 如何に國防國家體制を完成するか

1 英米依存を脱却せよ

さういふ風に、最近の各國の軍備は性格が變つて來たといふことを先づ頭に入れて置かなければならない。この點は、振返つて見れば日本人は從來非常にのんきで

あつた。支那においては既に三年半消耗戦をやつて來た。これは已むを得ぬとするも、その消耗戦は何をやつてゐたかといふと、アメリカから出來合品を買つてやつてゐたのである。自分の所で造るよりも外國のものを買ふ方が安いといふので、大事な武器まで買つてゐたのである。これは、日本の從來の經濟人の考へ方が、どちらが經濟的であるかといふことによつて主として左右されてをり、また個人の利潤追求上、どちらが儲かるかといふことが決定的であつたからである。ここに根本的な過誤があつたのである。

自由主義經濟の弊として國內における持てるものと持たざるものとの對立があり、富の力を持つたものが富を持たないものを搾取するといふことは國家社會の問題として重大であるが、それにも増して、國際的には現在の經濟觀念で凡てを打算するといふことは、一國の運命を左右する一層重大なことになるといふことを考へなければならぬ。日本では英米依存といふことが今日まで随分攻撃されて來た。英米依存の結果支那に於ても敢然と爲すべきことが爲せず、いふべきことも云へぬといふ

やうな點が擧げられてゐるが、英米依存の最も大なる弊害は日本工業が獨立し得なかつたこと、従つて日本の軍備に缺陷を生じたといふ點にあると思ふ。これは一日も速かに是正しなければならぬ、過般の日獨伊同盟は日本のこの英米依存を厭やでも棄てなければならぬやうにさせた。あの同盟が出来たためにアメリカ邊りから來る物の分量が減つて來てゐる。經濟人はこれを見て、同盟の結果いい事は一つもない、悪い事ばかりだといふ。實際日本に物が來なくなつた、アメリカの壓迫が加はつて來たといふ點だけを見れば目前の都合は悪い。併し乍ら英米から物が來なくなることは日本の獨立のために實は必要なことである。自由にアメリカから物がはいれば日本としては益々踏切がつかないが、かうなれば、何としても自分で物を作らなければならなくなるのである。

2 自給要素は憂ひなし

日本の國防國家建設の爲めには、從來の觀念からいへば、先づ資本はこれだけし

かないから、この上は他から借りるより仕方がないといふ所である。が併し今日では貸す餘力のある英米が貸さないことは判り切つたことであるし、日本に好意を持つ獨伊は自ら戰爭をしてゐるから勿論餘裕がないのである。日本はどうしてもこの國防國家建設に必要な資力を自から捻り出さなければならぬ。私は今の日本に與へられた國力を以て、國防國家を建設することは決して不可能ではないと思ふ。

日本は現在日本が有つてゐる財力以上に、即ち從來の觀念に基く國力以上に生産擴充をやらなければならぬが、抑々生産に必要なものは先づ第一に勞力である。これは一億からの人があるのだから勞力不足とはいひ得ないのである。次に資源であるが、これも日本内地を初め朝鮮・臺灣・滿洲・北支それに南洋といふものが控へてゐるから、私は決して地下資源の少きを憂へることはないと思ふ。併し乍ら、既に資源があり、勞力があつても、從來の個人主義經濟に委せれば、それよりも必要なのはお金である、人よりも資本である。資本がなければ、地下から掘り出せないといふのである。從來の觀念を抛つて新しい工夫をしなければならぬのはこの點

である。

ドイツは同じ問題に當面して、これを見事に解決した。即ち金に代ふるに労力を以て準備として、貨幣を大量に出したのである。いくら札を作つても背後に物が無い限り價值がないといふかも知れないが、私はさういふものではないと思ふ。金がない、或は金に換へ得る物がなければ貨幣は價值がないといふのは自由主義時代の觀念である。

日本に於ても、國內的には今日既に日本の紙幣は換金出來ないが、誰もそんなことは問題にしないではないか。なるほどアメリカに行けば金がなければならぬ。國際金融資本の立場から見れば金が必要であり、又厭やでも金に代はるものが必要であるが、國內に於ては今日では事實において金の必要がなくなつてゐる。つまり通貨の觀念性格が變つて來てゐるのである。日本は金そのものから離れた經濟を現に營んでゐるのであつて、金がないといふ事は深く憂ふる必要はない。國內に於て貨幣といふものを國民がどう見るかといふ事が大切である。結局に於て、貨幣が國

内に通用するのは國家の力と云ふか、それに對する國民の信頼如何といふ事に歸するのである。國力に對する國民の信頼が揺るがぬ限り、國家の印刷する紙幣といふものはそのまま一定の價值を有するものであり、いはば資本であると考へられるのであつて、尠くともこれを以て一億國民の勞働力を動員するには充分であると思ふ。金を代表しない新しい貨幣は御免蒙るといふ人は一人もないと思ふ。資本の作用の中一番大切なことは勞力と材料を動員する機能であつてその目的を達するためには必ずしも従來の意味の資本のない事を憂へない。ただ經濟そのものに對する考へ方を變へさへすればよいと思ふ。さうすると、國防國家を作り上げるためには自然、經濟觀念、天地の間における物の評價、價值の判斷・標準が變つて來る事を必要とする。

3 價值理念を轉換せよ

即ち國防國家を作る過程において、自然と従來の資本主義的な或は國際金融的な

考へが清算されるといふ事になる。この轉換といふ事が直ちに經濟倫理、社會正義といふものと密接な關聯を持つのであつて、國防國家建設が自然にさういふ結果を伴ふといへるのである。さういふ風にして、先づ我々は出來得る限り物を作らねばならぬ。いくらお金を出してもそれだけでは物は出來ぬといふ人があるが、それは日本銀行で盛んに紙幣を出してもそれが直ぐに物にならぬことは分つてゐる、併し乍ら一億の人を働かす効果は確かにある、働いたら必ず物が出來る筈である。外國から物が買へぬ以上、國民が働いて造る以外に方法はない。全國民の勞働力を動員する、物の生ずる根源はそれ以外にはないのである。ドイツは金がないからして勞働を準備として貨幣を出した、ドイツの場合は勞働の外に多く據るべきものがなかつた。

勞働の中には技術も含まれるが、あの當時ドイツでは七千萬の人間及びその人間を以てする所の工業力の外に有力な財源はなかつた。然しどんな事があつても軍備は整へなければならぬからヒットラーの代用貨幣になつたのであるが、日本の場

合も勞働を準備として貨幣を出すと云つてもよいと思ふが、併し日本はドイツその他の如何なる國も持たないものを持つてゐる。日本には世界に誇るべきなき所の國體、天皇に對する我々の忠誠の念、國家に對する絶大なる信頼といふものがある。又更に日本は當時のドイツに比べて遙かに恵まれてゐる。それは何かといふと、御承知の通り、ドイツはヴェルサイユ條約によつて尾羽打ち枯らし四面敵性を持つ國に圍まれ、十數年の間國民は悲境のどん底にあつた、そして農村は破産に瀕してゐた。その時オーストリアの伍長ヒットラーが出て天下を取つたのであるから、果して狂瀾を既倒に廻し得るかどうか、何人もドイツの前途を樂觀する者はなかつた。それにも拘らず、ヒットラーが出でて數年ならずして、物の生産は多きは十倍、少なきも二倍になつた。國家の租稅收入も大變殖えて來た。ヒットラーの代用貨幣は當時、不換紙幣濫發の政策だと云はれたが、これが立派に効果を擧げたのである。日本の環境は、その點ドイツに較べ非常に恵まれてゐる。現在日本の直接支配下にある本國、朝鮮、滿洲、北支の資源だけでも澤山あり、更に南方には世界第一の

物に豊かな地域が無限に連つてゐる。我々の決意次第、努力次第でこれ等の物資はアジア人の手に、我々の手に取戻し得るのである。つまり日本はさういふ目に見えぬ所の色々の財産を持つてゐるのである。所謂「ポータシアル」に於ては日本は決して不足してゐない。今日、日本政府が百億の貨幣を出すとすればこの百億はさういふ極めて大きな「潛勢力」を代表してゐるのである。即ち百億圓の貨幣を出せばそのまま百億圓の價值が魔術のやうに創造されるのだといふ事が出来るのである。然るに金がない、物が無い、勞力がないといつて心配してゐるのが今日の日本である。これは從來の經濟觀、價值觀に毒されてゐる敗北主義的な觀念であつて、新體制といふものはさういふものの價值に對する根本理念の轉換を伴はなければならぬといふ事が私の持論である。

4 今日悩みなき國家なし

國際關係に就ては、今日は何人も十分知つてゐると思ふから餘り詳しく述べない

が、目前、國民一般は非常な不安を持つてゐて今後どうなるだらうかと考へてゐるものが甚だ多いのである。その不安は何かといふと、支那事變で國力を消耗し、今では物が無いといふ、主として經濟的事にその不安の大部分が存するやうに思はれる。無論、その點、樂觀は禁物である。國民としては努力を此處に集中しなければならぬ事は當然である。

然し困つてゐるのは日本だけではない。例へば、我々と戦争してゐる重慶は日本よりも更に困つてゐる。支那のやうな神經の鈍い國民であり、國としても不完全動物であるから何とか外見は持ち耐へてゐるが、その實情たるや實に慘澹たるものである。また日本に敵意を持つイギリスにしても最後まで強い事をいつてゐるが、これも將に風前の灯なのである。私は、イギリス帝國の没落、少くもその本土の没落は、最早や時の問題だと思ふ。

一方、アメリカにおいては毎日のやうに歴大な豫算を發表し、その政治家のいふ事も至つて勢ひがよく、デモクラシイ世界の兵器廠になるとか全人類を救ふのだと

かいふが、實際の所アメリカの現在にはなかなか苦しいのである。従来アメリカは英佛といふものを自分の前衛として来たが、既にその前衛が潰滅しつつあるのである。フランスは破れ、イギリスも亦、將に命旦夕に迫るといふ状態であるから、アメリカの慌て方は大變なものである。

イギリスに對する援助を惜しまぬと云つてゐるのも、實はドイツやイタリアの攻撃に對して一日も永く持ち耐へさせ、彼等の力を消耗させ、その間にあらん限りの力を以て米國自身を守るための軍備を整へようといふのであるが、今日のアメリカの軍備は、今直ちに自ら戦争に加入する丈の餘裕があれば戦争するだらうが、それが出来ない、出来ないからこそ蒋介石やイギリスを頼んで持ち耐へるだけ耐へてくれればその内に餘裕が出来るから、氣の毒だがお前達は犠牲になつて呉れといふのが現在のアメリカである。然るにアメリカが強い事をいふと、日本では今にもアメリカがイギリスを援けると共に日本にもやつて来るのではないかと思ふものが多いが、米國は自分で戦争をやる餘裕はない。萬々已むを得ない場合以外は出来ない

のである。

假りに、日本が南進政策を執行したとしても、日本に對しアメリカは恐らくドイツに對して採つてゐる以上の態度には出でまいと思ふ。勿論日本に對する壓迫は更に強化し、或は經濟絶交までゆき、更に紙の上では日本と交戦關係に入る事になるかも知れぬが、今日のアメリカの軍備では到底日本に對して現實に戦争を仕掛けるだけの餘裕はない筈である。アメリカとしては實に容易ならぬ事である。味方が一つ一つ潰れてゆき、アメリカにどの程度の實力があるかといふ點になると、ルーズヴェルトその人も自信はないと思ふ。アメリカは豊かなる天然の條件をよい事に多年に互つて随分氣儘に振舞つて来た。黒人とヨーロッパの低級移民の勞力を搾取して少數金權者が勝手に政治をしてゐる。名はデモクラシー、自由の本山といふが、事實はユダヤ的金權寡頭政治をやつて來てゐるのであるから、いよいよ國を擧げて乗るかそるか戦争をやる時に一億三千萬の國民がどの程度に役にたつか、これは恐らくアメリカの政治家も自信はもてまいと思ふ。

5 國防國家即日本の革新たるべし

斯くの如く世界の大国もその肚の裡に入つてみれば樂ではない、日本だけが困つてゐるのではないから、彼我を比較してみると、日本の將來は、やりやうによつては悲觀は要しないと思ふ。

譬へば支那の戦争の如きも、假りに日本が兵を退いたとしても向ふから攻めて來る譯ではなく、飛行機一臺飛んで來る譯でもないから、日本の決意次第で都合が悪ければいつでも退き得る、これが日本の命取りになるとは考へられない。

又、日獨伊三國同盟が出來た以上、ソヴェートとの關係を危惧するにも及ばない。ソヴェートとしても中立を嚴守するだらうし、日本から仕掛けねば、向ふから戦争を仕掛ける心配はないと思ふ。我々はこの際、支那から白人の勢力を驅逐した餘勢を驅つて、更に南方からも彼等の搾取體制を一掃し、所謂、大東亞新秩序の建設といふ大事業に乗り出すとしても、何等不安も危険もないと思ふ。

無論、これは慎重を要するし、それに必要な外交上、軍事上の準備は整へなければならぬ。それが出來た以上は、我々はこの大理想達成に邁進しても差支へないと思ふ。併し乍ら前述の通り、日本の國防の源たるべき工業力が非常に貧弱であり、一つでも物を餘計作らねばならぬといふのであるから、この上、更に南方に進出して、英米といふ大国と戦争の危険を冒すのはいけないといふものもあるが、日本が國防國家を完成するためには、どうしても今の日本の勢力範囲では物資が足りない、實際上、南方の資源を利用せねば充分ではない。而して、この南方進出は専ら海軍を必要とするが、この海軍力こそ日本の最も大きい強味である。

實際に於ては私は火花を散らしての武力戦はここ一、二年は日本に迫つて來ないだらうと思ふ、假りに迫つたとしても海戦は陸上の戦争に較べれば消耗は五分の一程度といふから、日本の國防國家建設に必要な經濟的條件を備へるためのこの南進政策即ち東亞共榮圈確立といふ事は、國防國家建設と一緒にやつても矛盾はないと思ふ。一見日本の工業力の貧弱なる事、軍備充實の必要な事と、南方進出とい

ふ事は如何にも相容れないと思はれるが、實はさうでないのである。國際環境といふものを充分吟味したならば、私は必ずしも大なる危惧なしに決行し得る事と思ふ。

要するに、この國防國家の建設といふ中心觀念に基いて國防の充實、軍需工業の擴大は今日の日本の焦眉の急であるが、これと同時に、各方面に於て所謂、新體制といふものが合理的に經濟倫理、社會正義と合致して併せて實現されねばならぬのであつて、これが現下日本の根本目標でなければならぬ。從來の如く單に軍部の欲する高度の軍備を持つ事ではなく、全體軍備を持つ事それ自身が、精神的に日本の生れ變りを意味するものでなければならぬ。(皇紀二千六百一年一月十四日九大日伊文化協會)

主催講演速記、「福岡日日新聞」一月二十三日乃至二月六日掲載

第九章 生産力擴充第一主義

一 國防力の完備と近代戰の特質

1 國防國家と日本の軍備

これまでも幾度か提唱して來たが國防國家と云ふことは新しい觀念であつて、從來の意味の單なる軍備充實と云ふ事とは全く違ふのである。物的、精神的、一切の國力を國防に統合すると云ふ事であり、従つて政治及び經濟の體制をも、これに適合するやう改變しなければならぬと考へられるのである。例へば今日アメリカが全力を盡して再軍備をやつてをるが、アメリカの自由主義、資本主義そのままの形

で國防國家をつくると云ふことは出来ないであつて、アメリカの工業力、並に豊富な資源をもつてすれば軍備はいくらでも出来るであらうが、全體戰爭——所謂國家總力戰に臨む國防國家體制と云ふものは出来ない。このことは日本の目前の問題から見て極めて大事なことである。

世上往々、國防國家に關して、高度國防國家と云ふやうに、特に「高度」と云ふ事に力を入れてゐるが、かくするとただ軍備を充實すればよろしいと云ふやうに取られて、國民全體の心構へに大變な違ひが出て來ることは注意しなければならぬ。軍備充實と云ふことは從來専ら陸・海軍が主唱して來た。だからただ「軍備」と云へばその一般の通念によつて律せられる。殊に自由主義の華やかな時代に於ては政黨といふものが常に軍事豫算を削減することを最大の任務として來た。その記憶があるからして、今日でも頻りと國防國家と言ふけれども、さう國防國防と軍備ばかりに力を注ぐわけにはゆかん、第一國民中食ふや食はずのものがあるのに一切を擧げて軍備に没頭するわけにはゆかん、かう云ふ議論が起つて來るのである。そこで

この際は國防と云ふことが從來の觀念と根本的に變つて來たと云ふことを餘程深く國民の頭に徹底させなければならぬ。それには所謂全體戰爭といふものがどういふものであるか、近代軍備と云ふものが如何なるものかといふことについて、今少しくその道の人達から國民に話かける必要があると思ふ。

自分は外交を専門にして來たので、軍事は固より素人である。ただ一昨年イタリアに行つて、日獨伊同盟の交渉に當ることになつたのであるが、他國と軍事同盟を結ぶからには武力の關係は何うしても一通り研究しなければならぬ。そこでいろいろと専門の人に話を聴き、文獻も漁つてみたのである。それで非常に驚いたのは、我々が從來考へてゐたのと、最近の軍事思想と云ふものが非常に違つてをるといふことである。

私は日本自身の軍備がどうであるかに就ては多くを知らない。殊に最近どの程度に我々の軍備が進んでゐるかは全く分らないのであるけれど、外國方面殊にソヴェト・ロシア、ドイツなどのこの方面の文獻を見ると、近代軍備と云ふものは途方

もない歴大なものであり、その根本の理念も從來我々の想像もしなかつたものであることを發見して、日本に果してかう云ふ軍備や心構へがあるのだらうかと云ふことに非常な不安をもつたのである。殊に外國の評論家に言はせると、ひどいのは日本を三等國——ポーランド程度であると云ふことを、而も日本に相當好意を寄せてをる方面で云つてをるのである。これは彼等外國の批評家も日本に關する最近の情報は恐らくもつてをらんのだらうし、無論稍々古い材料によつて日本を批評してをると思ふのであるけれど、しかし他山の石として、我々としては彼等が日本をさういふやうに見てをると云ふことを深く反省しなければならぬ。外國方面で日本の軍備をさういふやうに見るといふことは外交を進めて行く上に於て非常な不利である。殊に境を接するソヴェート・ロシア、利害が正面から衝突して居る英・米といふものに對する外交の推進が頗る困難である。最近日本に對してさう云つた諸國が恫喝的な、高飛車的な態度に出てをるといふことは、日本の軍備に關するさうした彼等の見解に原因するのではないかとさへ思ふのである。蔣介石あたりがやがて日

本が參るやうに考へてゐることも、さういふ外國方面の意見に耳を傾けてゐると見なければならぬ。

2 近代機械化軍の特質

勿論日本軍の人的素質と云ふものに就ては外國方面でも何人も過小評價するものはないのである。支那事變に於ても日本將兵の素質といふものは依然として優秀であり、勇敢無比であるといふことは認めてをるのである。それにも拘らず日本軍の實力に就て前に述べた様な評價をしてをると云ふことは、これは實に裝備の問題、更に日本の工業力及び資源と云ふものに就ての判断から出るものである。實際今日の全體主義的な諸國の軍備を見ると、その機械化の程度及び分量と云ふものは驚くべきものがあるのである。この間のフランスの戦争ではドイツは比較的狭い戦線に五千臺からのタンクを使つたといふことであり、軍事評論家は今後の戦争に於ては一キロの戦線に三百五十臺から四百臺のタンクを集中すると云ふ事を言つて居

るものもある。飛行機の如きものも一寸しても直ぐ五百臺から千臺と云ふものが飛出すのである。

ヨーロッパ方面では今日テクテク歩く兵隊と云ふものは殆どない。歩兵と雖も自動車に乗る。また實際近代軍は非常に歩度が速いので所謂「歩兵」では役に立たないのである。それを日本あたりではまだこの前のヨーロッパ戦争の歩兵を中心とした軍隊の装備をやつてゐると彼等は云ふのである。もう歩兵の時代といふものは過ぎてをると考へる人も澤山ある。機關銃とトーチカで守るといふことになる、從來の歩兵ではこれを攻める事は無理であるとされてをり、前大戦の西部戦線の膠着が之れを證明したのである。あの戦争の末期にタンクといふものが始めて使はれた。イギリスがこれを多數使つて膠着状態を破つたので、ドイツはフォッシュ將軍にではなくタンク將軍に負かされたと云つたものである。つまり防禦と攻撃とでどちらが強いかと云ふ問題がタンクを用ひることに依つて始めて解決出来たのである。それ以來將來の戦争ではタンクと飛行機が、機關銃と塹壕又はトーチカをもつて守る

歩兵の陣地を突破する唯一の方法であるとされてをつたのであるけれども、これを實際に軍備に現はしたものが赤軍と今日のドイツ軍で、フランスあたりは餘り充分でなかつたし、イギリスに至つては最初にタンクを大規模に用ゐて前大戦ではああいふ成功を収めた經驗をもちながら、戦後この方面は閑却してをつた。然るにロシヤとドイツが充分にその教訓を活用して今日素晴らしいものをつくつたのである。

さういふやうに完全に機械化し、その分量が非常に大きくなつてくるといふと、一國の軍備と云ふものは工業力の問題になつてくるのは自明の理である。今日の戦争では一流國は一年間にどうしても四千萬トンからの鐵が要るだらうと言はれてをる。と云ふのはこの機械化戦争は消耗が非常に激しいのである。飛行機でもタンクでも、第一線に例へば一萬臺の飛行機・戦車を維持しようとするれば、銃後の工業は一年に四萬から五萬の製造能力がなければならぬと云はれて居る。しかし、果して、さういふやうに歴大な装備が要り、消耗率が大きいといふことでは、これに堪へられる國は世界中に幾つもない。實際問題として歐米の軍事評論家が言ふやうに、

列強はさういふ龐大な力を先づ集結して後、始めて戦ふかどうか、これは別問題である。併し乍らドイツやソヴェートの装備、工業能力を見ると、大體これに近いものをもつてゐると云ふことが出来るのである。

これに對して現在の日本の工業能力といふものは遺憾ながら遙かに及ばない、或る物は一桁違ふとさへ言はれる。近代の機械化部隊の戦争に於ては物質力にそれだけの差があると云ふことは甚だ重大な問題であると思ふ。彼のフランダースあたり
の戦績を見ても、機械化戦といふものは殆ど殲滅戦であつて、如何に士氣が旺盛であつても、日本魂を百パーセント發揮しても、物質力に餘り大きな差があるときは、これはなかなか皇軍と雖もやつてゆけない。實に迷惑至極な世の中になつたもので、境を接する國がさういふ軍備をもつてゐるとすれば、日本としてこれは死活に關するわけで、從來のやうに軍部が軍備をやり、これは専ら軍人の問題であると云つて、國民が暢氣に見てをられる譯のものではない。タンクでも一時間に七十軒も走り、飛行機の發達も著しい今日、滿洲國は勿論、日本本土も島國であるといふ從來の安

全な地位が失はれるといふことになつたので、最早や軍部だけの問題ではなくして、國民全體の問題となつたのである。全體戦争の今日では、戦闘員も非戦闘員も區別がなくなつて來た。國を擧げて準備し、國を擧げて敵に當らなければならぬ世の中となつて來たのである。

3 人的素質と近代機械化軍

この情勢は陸軍に關して特に著しいものがある。といふのはソヴェート・ロシアと云ひ、ドイツと云ひ、所謂世界の陸軍國が全體主義的な、總力戰的な國防國家組織をもつて來たからである。海軍でも從來の主力艦中心の軍備に對し、全體主義的の諸國では、重點を潜水艦その他の小艦艇と特に空軍に置いて居り、今回の戦争の結果、若し世界一の大海軍を誇る英國が敗れたとなれば、海軍力に關する從來の觀念が革命的の變化を來すかも知れぬ。併し乍ら、何れにしても飛行機が海軍の重要な要素となつて來たことは最早や問題はないのである。而も

飛行機と云ふものは消耗率が非常に大きいのであるから、軍需品製造能力が海軍に取つても極めて決定的になつて來たのである。やはり、國防國家體制を整へなければ、日本の海軍と雖も英米と拮抗は出來ないといふことになつてくるのである。尤も世界の軍事評論家は日本の海軍をなかなか高く評價してをる。實力に於てアメリカあたりにも少しも譲らぬ、アメリカが全艦隊を擧げてへこれにイギリスの東洋艦隊を加へても日本の海軍を破る事は出來ないと言ふ者も多いのである。だがしかし、それは現在具へてゐる力の比較を言つてをるのであつて、アメリカはああいふ歴大な海軍をつくりつつあり、日本がこれに對抗してゆくには非常な工業能力をもたなければやつてゆけないのである。

つまり軍備なるものが、從來のやうに人的要素が重きをなし陸軍で云へば歩兵が中心になつてゐた時代と、今日のやうに機械といふものが中心になつて來た時代とは、大變にその組織・性格が變つてくる。結局戦争——民族と民族の戦争といふものは、民族の精神力、體力の外に、物質力、經濟力の戦争といふ部分が著しく重

要になつて來たのである。日本の最も得意とするところの人間、日本魂といふものがものを言ふ程度が減つて來たのである。この前の日露戦争の時には兵力の關係ではロシアと日本とは比較にならなかつたが、あの當時の程度の装備なら人間が武器不足を補ひ得た。實際に於てあの當時に於ても装備は日本の方が大分劣つてをつたといふことであるけれども、しかしああいふ種類の軍備なら人間の優秀性をもつて補ふことが出來たのである。併し今日の戦争に於てはどうしても人間の力だけでは拮抗出來ない。機械には機械を以つてしなければならぬのだ。同じ機械をもてば今度は矢張り人間の優秀性がものを言うてくる、併し機械の種類性能が違ふ、分量が餘りに違ふといふことでは、どうしてもさうはゆかなくなるのである。竹槍三百万本ではどうにもならないのである。國民の士氣を鼓舞することが今日の急務であるのならば兎も角、自分の見る所では、從來物質的方面が餘りに閑却されて來たやうに思ふ。現下の日本に於ては、この弱點に最大の努力を傾けなければならぬのであるから、國防國家も専ら生産擴充を強調すべきである。

二 新經濟政策を提唱す

1 生産の三要素

そこで日本の國防國家を然らばどうしてつくるか、工業力を急速に發展させなければならぬが、それにはどうしたらよいかといふことになる。第一に何と云つても、物を澤山つくらなければならぬ、生産力の大擴充をやらなければならぬ。從來の日本の一番の缺陷は所謂商業立國的な政策をとつて、外國から物を買つた方が安上りだと云つて軍需に至るまで外國から出來合品を買つて居り、技術でも日本で發達させるよりも、外國の技術に依存して來たことにあつた。然るにその外國といふのが主として英米であつたのだ。今日ドイツやイタリアは日本の友邦であるが、自身が戰爭して居るから、日本に物を供給することは困難である。だから従

來のやうな外國依存といふことは今日これをやらうとしても、今更アメリカやイギリスからは何も買へるものではないのである、之は絶対に出來ないものと思はなければならぬのである。外國からは何等援助を得られないのである。日本自身の手でやらなければならぬ。而も今言ふやうな歴大な工業力を急速につくり上げなければならぬといふのが目前の問題なのである。

何處から之を産み出したらいいか。物をつくるには

第一に、労働力（これは技術も無論加へる）

第二に、原材料

第三に、資本

といふわけである。

2 労働力と技術に不安なし

労働力は日本の現在では、まだ充分に組織されてゐないやうであるけれど、これ

は兎に角一億の人口があり、之はドイツなどより多いのであるから、その力を充分に發揮させれば勞力の不足といふことは言へない筈だ。ただ勞働のうち最も大切な熟練勞働乃至技術といふものに於ては今日まだ大分不足して居る。之は主として、從來出來合品を外國から買つて來たためであるが、日本人に技術能力がないといふことは絶対に有り得ないのである。現に陸軍でも、海軍でもその工廠に於ては外國に比較して少しも遜色のない物をつくつてゐる。それにも拘らず一般の技術が進まないのはやらなかつたからである、その必要を感じなかつたから興らなかつたのだと思ふ。これは急速に訓練すれば無論出來る筈だし、やらなければならぬのである。殊に技術の進歩は、採算を度外視して、いくら金をかけても國家のために必要なものは作るといふことでやらなければ進まない。

民間の營利業者に任せておいては依然として技術といふものも進まないのである。民間の創意を活かすとか何とか云ふが營利を動機としての創意位では間に合はない。そこは國防國家であるから、儲かる儲からん、算盤に合ふ合はない、といふことが

決定的であつてはならない。算盤に合はなければやらぬといふことでは進歩は到底あり得ない。國家の爲に必要なならば金はいくらかかつてもいい、糸目をつけず、いくらでも國家が支辨するといふことでなければ到底技術は急激に進まない。この點ナチ・ドイツは恵まれてゐた。ヒットラーが天下を取つた時、既に無數の技術者群が存在してゐたのであるから問題はらくであつた。併しソヴェートの例を見れば、日本は少しも悲觀の要はない。あの技術に不向きなロシア人が、兎も角も今日の工業力を作り得たのであるから、その天分を有する日本人は、遙かに短日月で爲し遂げ得ると信ずる。

3 原材料は地下にある

勞働及び技術の問題はさうであるとして、原材料はどうかと云へば、これも從來は日本に缺けてゐるとされたのであるが、地下には確かにある。日本、朝鮮、滿洲、北支、而して更に南洋方面といくらでも地下に資源を藏してゐるのである。今日ま